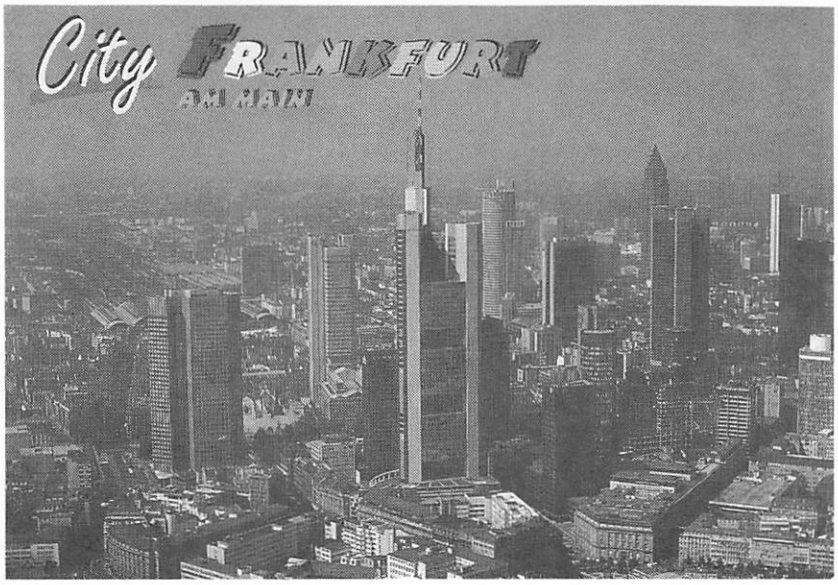
香 川 日 独 協 会 会 報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA



第１１号

Oktober 2003

ローテンブルグの町の門

目　次

夏・ドイツの旅 ---------- 中村　敏子　3

【特集・フランクフルト】
フランクフルトから ---------- シュレーダー美枝子　9
Ein paar Erinnerungen an Frankfurt ---------- Ralph Degen　11
フランクフルト雑感 ---------- 最上　英明　19

ドイツ一昔半 ---------- 井上　一男　21
「ドイツ」という言葉に今想うこと
　とどまるところを知らぬ社会の世俗化にひとこと ---------- 谷口　幸紀　23
ドイツ見聞録 ---------- 中尾　友紀　25
坂東の人たち ---------- 中村　敏子　40

【ホームステイ報告】
私の高松でのホームステイ ---------- ユリアン・ヨーン　42
高松および観音寺でのホームステイ ---------- クリストフ・ロドルフ　45
高松への派遣　白鳥―9月21日～30日 ---------- カーチャ・ノルト　48
はじめてホームステイを受け入れて！！ ---------- 金地喜世子　52
ホストファミリー報告
　ヘルムート・シュレックさんと再会しました 2002/9/15～9/18 ---------- 明神　実枝　56
ホームステイ報告 ---------- 武井　素子　63

【会員のご活躍】
第3回全国ドイツ語スピーチコンテスト ---------- （株）ビッグ・エス　66
オーバーハウゼン国際平和村への支援 ---------- （株）ビッグ・エス　68
ドイツワイン
　ワインの旅　ワイナリーからの訪問　ドイツワインの樹-- （株）ビッグ・エス　70
ドイツリキュール ---------- 樂空間　74
讃岐香川相互支援交流「モノ（者と物）づくりを通してネットワーク」
---------- 笠井　強　75
私の近況 ---------- ペーター・ヒンメルシュタイン　76
平成１５年度香川大学工学部国際インターンシップ交流会の報告 ---------- 77
２００２年度香川日独協会活動報告 ---------- 78

中村会長　スザンナさん　佐々木さん

徳富蘇峰直筆の絵の前で（スザンナさんのリビング）

夏・ドイツの旅

中村敏子

1975年、Münchenに初めて降り立ちどっぷりとBayernのとりこになってからもう、30年ちかくになろうとしている。数え切れない方のお世話になったドイツへご恩がえしのつもりで始めたドイツとの関わりの中で、特に協会に参画してからは一段とその幅も広がり、邂逅の知人も増えた。

去年の夏は、きし方々の足跡をたどり、私の想い出をたぐる旅となった。また、若い協会員のドイツでの活躍が増え、一人一人を訪ねその成長ぶりに心熱くもした。Wiesbaden 大学留学中の高田陽光さん、Düsseldorfで働く2人の女性、ドイツ北端の町Esensのギムナジウムで教師をしている逞しい女性など、大変たのもしい現実を知るとともに、娘たちをドイツへ連れていこうとした時「義務教育中は海外へは、はばかれる」とお叱りを受けた30年前とは隔世の感しきりで、彼らには自覚と責任を持って今をしっかり生きて欲しいと思った。

ほんの一部であるが、協会とご縁のある方たちとの再会を少し書き進めてみようと思う。

Susannaさんの思い出

あれは、2000年7月「ドイツにおける日本年」の行事に参加した香川日独協会一行を迎えるレセプションをBonn側が催してくれた夜であった。 会場の入り口で紫色の装いの小柄な老婦人から「お久しぶりね」と声をかけられた。 Susanna Zachertさんだった。こんなに懐かしくうれしいのは、私が背格好の似た亡き母と重ねあわせていたせいかも知れない。となりの席でずっと母のぬくもりを感じた至福の刻をすごせた。日本人の言葉がみだれているこのごろ、なんときれいな響きの日本語だろうといつもしっかりと聞いた。

「年寄りでございますから少し早めに帰らせていただきます」

Köln郊外でお住まいの牧師夫人佐々木さんと静かに席を立たれた。

佐々木さんは、「ズザンナさんの架けた橋」（集英社）の共著者であり、長い友人でもあった。Susannaさんのご主人故Prof. Dr. Herbert Zachert氏は、Bonn大学で日本学科を創設され、Bonn独日協会をおこし初代会長をもつとめられた。また戦前、旧制松本高等学校のドイツ語教師として日本に赴任され多くの教え子を世におくられた。Susanna さんの生涯を振り返ったこの本は、ドイツ人の父と日本人の母に朝鮮半島・仁川で豊かに育てられ、Hamburg大学で知りあった夫に伴い来日。 戦争をはさんで14年間滞在、世情のむつかしい時を冬は水道水も凍る軽井沢に疎開、家族そろってやっと帰還したドイツでは収容所ぐらしが待っていた。まるで日独の現代史をなぞるように険しい時代を精いっぱい明るく明日に向かって生きた女性の姿を書き留めたものである。この本のことは新聞のコラム記事、香川日独協会会報（第5号）などでご存じの方もあるかと思う。

こうした夏のつどいが別れとなり、訃報は翌年の春4月とどいた。享年93才。

Fuji Susanna Zachertさんの告別式に参列した友人から 便りが届いた。

「ご家族、日独のお友達に見守られて旅だたれました。教会で素晴らしい音楽を聞いているとZachertさんが蝶々になって私達の上をとんで、あの軽やかなやさしい声をかけて下さるような

気がしました。これからも見守って下さることでしょう。彼女は最大限に自分の人生をいききった素晴らしい方だと思います。ご家族の方々も素晴らしい想い出をいっぱい作ってくださったZachertさんに感謝の念でいっぱいのようでした。」

間もなくして、ご長男のProf. Hans.Zachert氏（前・ドイツ連邦刑事警察庁長官）から手書きの便りが届き、花にかえた小児がん対策のためのイザベル財団への寄金のお礼と母との交わりを感謝するとの内容であった。

娘婿のチェロ奏者Rudolf. Weinsheimer氏（元ベルリンフィル・チェリスト）は、震災後、神戸を元気づける催しのひとつ「1000人のチェロ・コンサート」を1999年11月神戸在住の松本巧氏と一緒に成功させ、大きな反響をよび、ご存知の方も多いと思われる。 葬儀のあと、東京のコンサートでは、義母からの挨拶としてエルガーの「愛の挨拶」を演奏なさったという。

その後7月、ご縁はつづき、8番めの末孫Francesco Piergianniくんがホームステイで暑い高松へやってきた。協会員柳沢宅で家族5人との大学官舎の数日間は、きっと彼にとって掛けがえない体験であったと思う。

屈託のない17才の彼にとって「おばあさん」の話となると食事の内容になり、海老のてんぷら、すきやき などいろいろと数え上げた。亡くなられる間際まで彼の日本行きを案じ、旅行社はどこがいいかしら、など周りのかたに相談なさっていたときいた。あとでの話であるが、彼は歯科医のお母さんと一緒に日本へ来ていたようである。やはりこれもSusannaさんの心配りであったのかもしれない。Kölnのご自宅を訪問した時、近くに住む末孫の面倒をみるのが生きがいなの、彼の成長を楽しみに4階までの階段を日に何度も通いますのよ、とにこやかに話された姿が目に浮かんだ。

8月の昼さがり、どうしてもお墓参りをと思い、Mönch さんにお願いして墓地まで案内いただいた。「日本人はいつも白い花なのに」と彼女がいぶかるのをかって明るく楽しい花を好まれたSusannaさんのためにそのような色を墓前に選んだ。緑のおおいかぶさるような墓地は角地にあり、こじんまりとした石灯籠と赤い紅葉が垂れるしずかなたたずまいのなか、自然石にご夫妻の名前と日付がきざまれてあった。終焉の地はBonn郊外BadGodesbergの一角にあった。

日本とドイツの架け橋として生涯をかけて私たちに残された贈り物「何事にもさりげなく取り組んでみる好奇心と柔軟なこころ」、 これは人生の宝として素直にうけついで行きたいと思う。すてきな遺産をのこされた者として。

スザンナさんのお墓

Stuckenschmidt 宅にて

Königswinter にあるお宅まで、Rhein 河をフェリーで渡り緑の木立の中をひた走り夕立や雷雲に追っかけられながら到着した時は幸いに晴れ上がっていた。Mönch さんの好きな「神風タクシー」のように彼女は走り抜けた。

広い田舎屋を改修したお宅で、ご夫妻は作陶と野菜作りにあけくれる健康的な生活を送られていた。広大な芝の庭には大きな石柱が５、６本立っており、モダンな眺めは気持ちを雄大にさせる。ベンという真っ黒い犬が用心棒のように付きまとう。南斜面には いんげん、ささげ、ズッキーニ、日本かぼちゃ、とうもろこし、青しそ、紫しそ、きうり（日本）などなど。この野菜たちを巨大なめくじがあらすので、朝早くから退治するのが大仕事とのこと。

書斎で手作りクッキーとおいしい日本茶をいただく。Siegburg 独日協会のこと、Bonn-Rheinsieg 大学のことなど話題になる。「この大学は創立時に私がかかわった大学なので、是非うまく交流をすすめてほしい」と先生。現在、香川大学工学部と相互交流提携をもち、２名の学生がそれぞれの地で企業研修を受けている。

いつだったろうか。先生が東京 DAAD 所長としてご活躍のころ、アイパル香川で海外留学アドバイスのお話をいただき、そのあと讃岐うどんを賞味いただいたことがあった。当時この説明会に参加した女性２人がドイツに学び、それぞれがドイツにかかわる仕事についている。

初対面は、はるか昔のようにも思えたが、長いお付き合いの中で、お顔つきとか話ぶりとか、いつもお変わりなく、自然体でたんたんとなさっていた。ご夫人の作陶部屋でも話しきりで、尽きぬ想いいっぱいでお宅を辞した

シュトゥッケンシュミット邸にて

音楽隊のふるさと

協会の10周年記念に招いたBayern音楽隊のふるさとDürnbachをドイツに住む娘とたずねた。

Münchenから電車で1時間ほどのところにある小さな美しい村はTegern湖のまわりに点在する保養地として、窓辺に花の咲く家並みがゆったりと続いていた。迎えにでてくれたWinkler隊長はいつものとうり大声で歓び体をゆすって精力的にしゃべった。若い踊り子たちも数名、近くのまちから集まってくれ、レストランで賑やかな昼食がはじまった。テーブルのまわりを蜜蜂が飛び回り、それを手ではらいながら樹のしたでの食事はのんびりとつづく。彼女たちは高松でのアルバムを開きながら話かけるが、まじかで顔をつき合わすと体格の良いのに、改めて目をみはるばかりであった。

しばらくして、一行は隊長の家を訪ねることになった。典型的なドイツの木組みの家はまだ新しかった。すぐ側を流れる小川は水嵩がふえ、岸をあらい聳える遠くの山々からの流れを満々と運んでいた。

地下室にあるサロンには、楽団を率いてまわった国々の写真とトロフィが並び、隊長の華々しい活躍の様子が良くまとめてあり、マネジャーと紹介されたご夫人はお孫さんと一緒に現れ、いろいろと気づかいをみせた。

お土産に、先週山で採ってきたというエーデルワイスの白い小さな花を数輪、紙にくるみ、片目をつぶっておどけて手渡してくれた。

高松のみなさんによろしくとの言葉をつけ、また大きく体を揺すって笑った。

（香川日独協会会長）

特集

フランクフルト

フランクフルトから

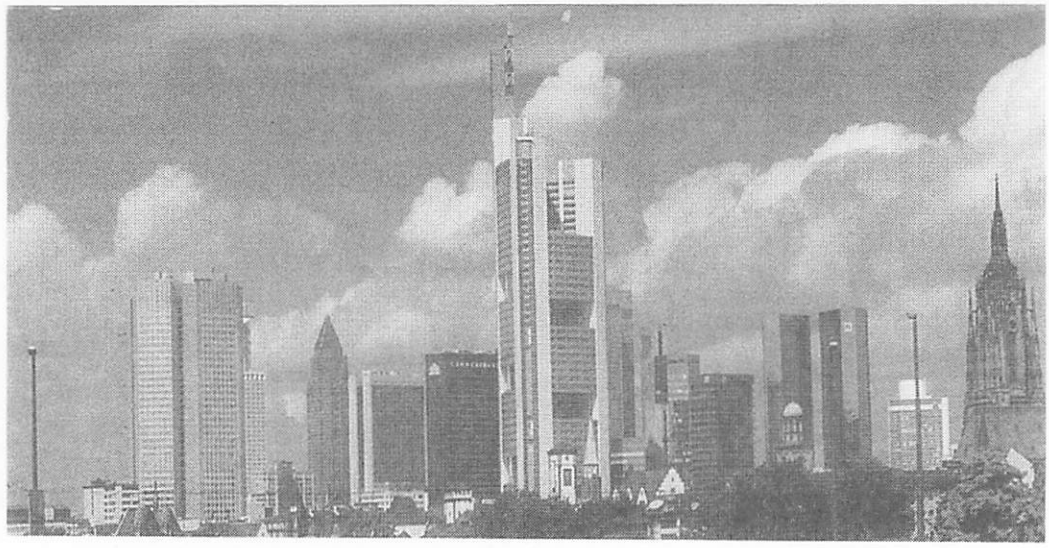
シュレーダー美枝子

初めてドイツの地に足を下ろしたのは1965年の3月9日であった。春の日本から雪の降る空港に着いた時には随分遠い所まで来たものだと思った。以来38年以上の月日が過ぎてしまった。この間にフランクフルトも日本のめまぐるしい変化に劣らない程の様変わりを遂げた。

40年前のこの町はとても静かで、中心の商店街でも平日は人出も少なく、ゆったりとしていた。今は何時街に行っても大変な賑わいで、何処からこんなに人が集るのかと不思議な程である。街一番の商店街ツァイルを走っていた市電も地下鉄に変わり、ドイツでもごく最初に出来た歩行者天国となり、プラタナスの並木の下には姉妹都市ゆかりのレストランがあり、辻音楽師や露天商など、時間帯によってはまっすぐに歩けない程である。

戦前は木組み建築の家がヨーロッパで一番美しいと言われていたそうだが、第二次大戦の空襲で85%が焼けてしまった。フランクフルトには昔から進歩進取の気風があり、他の町に先立って街の中心に高層ビルを建てた。このスカイラインがフランクフルトの新しいシンボルとなっている。高層ビルの集中するニューヨーク・マンハッタンとマイン河をもじってマインハッタンと呼ばれることがある。

現在ヨーロッパ最高のビルがコンメルツ・バンクで258.7m50階、1997年に完成した。環境保護を考慮して冷房は建物の一部にしかなく、多くの部屋は天井に冷水を循環させて夏の外気温との差をつけている。また建物の中央が数階に渡って吹き抜けになっていて、そこに鬱蒼と繁る庭園もこのビルの特徴である。ただし暖房は全館に入る。



その外形から「フランクフルト鉛筆」の愛称を持つメッセタワーが 256.5m、54 階で二番目に高いビルだが、やはりメッセ会場の近くに目下企画中のオフィスビル「ミレニウム」が完成すれば 365m、91 階の超高層建築となる。

ドイツの不況の波をかぶっている建築業界であるが、フランクフルトを見ている限りその不況が信じられない。フランクフルトの街は今到る所で様変わりしている。昔の屠殺場はマンションと商店・レストランに、中央駅南側のマイン河畔にはホテルやマンションが少し変わった様式で出現した。前貨物駅跡にはこれも斬新なデザインのメッセ会場が出来ている。

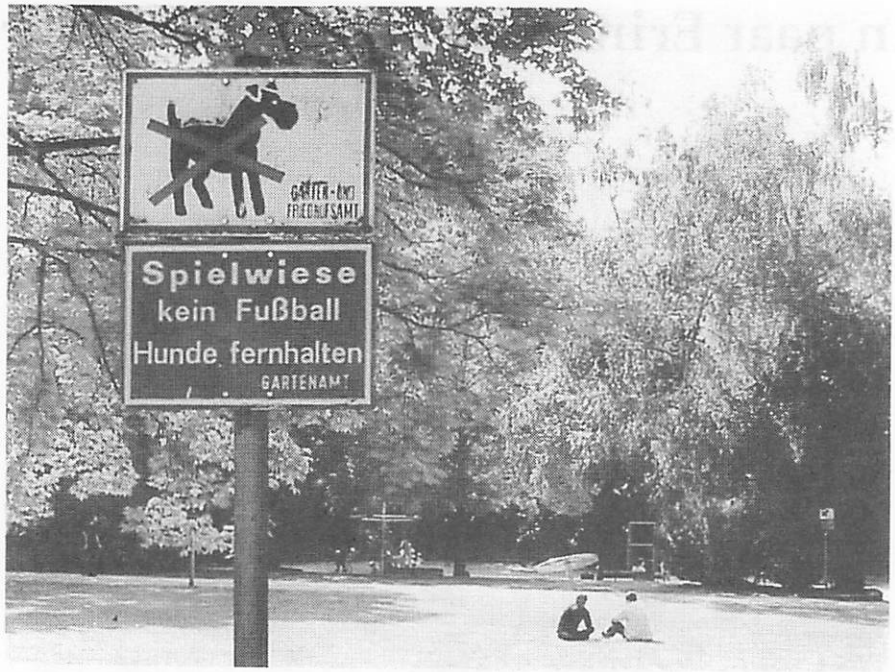
高層ビルばかりでなく面白い設計の建築が増えてゆく中で、旧オペラ座の北に出来た「フランクフルトの波」と呼ばれる一角を紹介しておこう。昔はレーアバッハと言う川が流れていたそうだが、現在は通りの名として残っているだけである。この川の流れを記念に、通りに面した約 250m の建物の壁が波型になっている。道の端には川の流れのような堀が作られて、片側の建物には木橋を渡って入る。この建物群を更に面白くしているのは五つのメディア芸術のアトラクションである。コンピューターとデジタルビデオを駆使して、堀端に人が近づくと水の中に文字が現れて、それを辿ってゆくと俳句になる。七人の日本の俳人と十人のドイツ人の作品が使われている。直径 4.5m の金の玉の中に入ると、掘り下げた床にフランクフルトの地球の真裏の海がデジタルビデオで映し出されたり、ある建物のロビーの壁をやはりデジタル映像の滝が流れ落ちており、様々な角度から見たり、自分の顔を水と共に流れ落とすことも出来る。別のロビーの一角には人が来ると日常の色々な音が聞こえる。堀の一部には壁が立っていて、ここには本物の水が流れ落ちている。一定の場所に人が来ると、この水の中に映像が現れて、来た人の動きに合わせて映像も空手や合気道などの動きを見せる。こう言われても実際に見ないと理解できないであろう。百聞は一見に如かず、是非一度見学に来て頂きたいものである。

（フランクフルト独日協会理事）

Ein paar Erinnerungen an Frankfurt

Ralph Degen

Was gibt es über Frankfurt zu schreiben? Fangen wir vielleicht mit den geographischen Daten an. Wo liegt Frankfurt? Wie jeder gute Christ weiß, dreht sich die Sonne um die Erde und zwar deshalb, weil sich die Erde im Mittelpunkt des Universums befindet. Das ist soweit logisch. Wenn man nun einen Blick auf die Landkarte wirft – eine richtig, also eine, die man in Deutschland kaufen kann – erkennt man sofort, dass Europa in der Mitte der Erde liegt. Jeder der behauptet, die Erde sei rund, lügt. Wenn sie rund wäre, würden die Japaner und Neuseeländer ja runterfallen – auch logisch. Und in der Mitte von Europa liegt Deutschland und Frankfurt liegt in der Mitte von Deutschland, folglich liegt Frankfurt in der Mitte des Universums. Soviel kann man also mit apodiktischer Gewissheit sagen. Natürlich weiß das jeder Frankfurter von Geburt an. Letztens hat sogar jemand ein Gen entdeckt, das eben genau diese Information trägt, als Erbinformation, wie das *wabi-sabi*-Gen bei den Japanern – natürlich haben das Gen nur Frankfurter (nein, die Würstchen haben das Gen nicht, die wachsen nämlich auf Bäumen und sind deshalb ganz anders als Menschen, die bringt ja bekanntlich der Storch, aber das weiß ja jeder, der im Sexualkundeunterricht aufgepasst hat). Wie dem auch sei, Leuten von woanders muss man das mit dem Mittelpunkt des Universums halt erst erklären, was hiermit geschehen ist.



Frankfurt ist gar nicht so groß. Von der Einwohnerzahl her ist es etwa doppelt so groß wie Takamatsu oder ein Zwanzigstel der Innenstadt von Tokyo. Von der Fläche her ist es auch nicht besonders groß. Nur etwa $2{,}859857757585 \times 10^{5756658587575}$-mal so groß wie das Universum vor dem Urknall. Trotzdem kennt es fast jeder, entweder wegen der Würstchen, die eigentlich aus Neu Isenburg kommen, oder wegen des Flughafens, wo alle schon mal waren, die Frankfurt nicht wegen der Würstchen kennen. Oder kennen die die Würstchen auch? Der Flughafen ist ziemlich groß und es kann leicht passieren, dass man sich verläuft und dabei verhungert, wenn man nicht genug Würstchen dabei hat, obwohl es ziemlich viele Schilder dort gibt. Manche Leute finden nie wieder raus und tatsächlich habe ich in den Randbezirken (z.B. in der Nähe des Busbahnhofs, hinter dem sog. Airportcenter) schon öfter Knochen, ja sogar Schädel, gefunden, die vermutlich einmal Reisenden gehört haben, wahrscheinlich Philosophen, die auf dem Weg zu irgendeinem Kongress in Brasilien oder Noboribetsu waren und den Überblick verloren haben, weil es auf den meisten Schildern nur Bilder und keine längeren Sätze gibt.

Aber wie dem auch sei, in Frankfurt gibt es ja nicht nur den Flughafen, sondern auch die Stadt und um die soll es hier ja gehen. Wie oben erwähnt, ist Frankfurt nicht besonders groß. Man kommt von jeder Stelle aus mit dem Rad innerhalb von ca. 20 Minuten (mit einem *mamachari* ca. 6 Stunden) zum Stadtrand. D.h. dass man irgendwo im Wald oder auf einem Acker steht. In Japan gehen die Städte nahtlos ineinander über. In Deutschland ist halt Wald oder zumindest Feld dazwischen. Auch in Japan gibt es natürlich Wald aber der ist immer auf kleinen Bergen. Der Wald bei Frankfurt ist richtig flach. Die ersten paar Semester als ich studiert habe bin ich immer von Sprendlingen (ca. 10 km südlich von Frankfurt) mit dem Rad zur Uni gefahren und zwar durch den Wald, zumindest die Hälfte der Strecke.

Nach ein paar Semestern Radfahren bin ich dann nach Frankfurt gezogen und zwar in die Münchner Straße. Irgendwo in der Mitte von Frankfurt ist der Hauptbahnhof und von der Vorderseite des Hauptbahnhofs (in Frankfurt gibt es einen sogenannten „Sackbahnhof", d.h. die Züge müssen rückwärts wieder rausfahren) gehen Sternförmig ein paar Straßen ab. Die in der Mitte heißt „Kaiserstraße" und ist ein Synonym für „Puffviertel", was eigentlich nicht stimmt, weil sich die ganzen Puffs in den Nebenstraßen befinden, die alle nach Flüssen benannt sind: Elbestraße, Moselstraße... Früher war die Kaiserstraße einmal eine ziemlich vornehme Gegend, was man an den prächtigen Altbauten erkennen kann. Eine der anderen sternförmigen Straßen ist die Münchener Straße, dort habe als erstes gewohnt, als ich nach Frankfurt gezogen bin. Da ich Student war, habe ich dort mit zwei andern Typen zusammen in einer WG (Wohngemeinschaft) gewohnt. Die Wohnung war in einem Altbau im vierten Stock (jap. 5. Stock) ohne Aufzug. Die Decke war über 3 Meter hoch und ich habe mir als erstes ein Hochbett gebaut, unter dem man aufrecht durchlaufen konnte. Die Münchener Straße führt vom Hauptbahnhof zur Oper (wo auch das Theater ist). Unser Haus war nur etwa 100 Meter von der Oper entfernt. Oft habe ich mit Rolli, einem meiner Mitbewohner, am Fenster gestanden und geschaut, was auf der Straße vor sich geht, und das war wirklich interessant.

Und hiermit wäre ich auch schon beim Thema. Was sind die Besonderheiten Frankfurts. Bisher hatten wir den Flughafen und die Würstchen. Zwei weitere Charakteristika wären, dass es ziemlich viele Ausländer gibt und dass es heftige Unterschiede gibt. Vor allem die Münchener Straße ist sehr international. Mindestens die Hälfte der Leute, die man auf der Straße trifft sind Ausländer und auch viele Geschäfte sind ausländisch. Es gibt Cafés, in denen es nur Männer mit Schnauzbart und keine einzige Frau und auch keinen Kaffee, sondern nur Tee gibt. Es gibt natürlich jede Menge Dönerbuden (wo man als Vegetarier auch Falafel-Döner bekommt) und türkische Lebensmittelgeschäfte, aber auch eine Moschee und einen afrikanischen Friseur, der eigenwillige Haarteile und spezielle Pomade verkauft. Weiter in Richtung Bahnhof gibt es noch einen „normalen" Supermarkt und daneben eine Kontaktkneipe mit Telefonen am Tisch. Wenn man in der Münchener Straße in die Straßenbahn Linie 11 steigt, und am Bahnhof vorbeifährt, kommt man zum Gallusviertel, wo es noch viel mehr Ausländer gibt. Da habe ich als nächstes gewohnt.

Wie oben schon angedeutet ist Frankfurt eine Stadt mit starken Kontrasten. Das sieht man schon an der Architektur: die Stiele und Zeiten sind bunt gemischt. Neben Altbauten gibt es Klötzer aus den 50er- und 60er-Jahren. Die Innenstadt von Frankfurt wurde im Krieg fast vollständig zerstört. Eigentlich blieb nur ein Haus stehen, das ist jetzt ein Restaurant drin, in dem es Eisbock gibt. Das ist ein dunkles Bier mit sehr viel Alkohol (geiles Zeug). Ebenso bilden die Kulturen und die sozialen Schichten einen sichtbaren Kontrast. Natürlich gibt es auch in anderen Städten soziale Unterschiede, aber sie treten nicht immer so deutlich in Erscheinung wie in Frankfurt.

So, jetzt hole ich nochmal kurz aus. Frankfurt ist ziemlich alt und war früher natürlich auch viel kleiner als heute. Außerdem hatte es eine Stadtmauer. Im Süden war der Stadtkern durch den Main begrenzt, von dem aus im Halbkreis eine Stadtmauer ausging. Heute sind von der Stadtmauer nur noch ein paar Meter übrig, der Rest ist eine halbkreisförmige Grünanlage, die eben an der Oper beginnt. Da ist das Operngebäude (nicht zu verwechseln mit der Alten Oper) mit viel Glas. Innen hängen ein paar Tausend Konservendosen von der Decke uns stehen ein paar Schaufensterpuppen herum, die aus dem Fenster schauen. Davor ist ein kleiner Platz mit einer Straßenbahnhaltestelle. Dahinter (oder davor, je nachdem, woher man kommt) ist die Taunusanlage, der Anfang des Grünstreifen, wo früher die Stadtmauer war. Als ich vor etwa zehn Jahren dort wohnte, war genau diese Stelle der Treffpunkt der Junkies (= Fixer, Heroinsüchtige). Abends, wenn es in der Oper eine Aufführung gab, konnte man also immer vor dem Operngebäude eine Masse hauptsächlich betagter Männer, frisch geduscht mit rötlich glänzendem Gesicht, Anzug und Frau im teuren Abendkleid (die meisten Leute gehen nicht wegen der Musik in die Oper, sondern weil sie ein Abonnement haben, was sich in gehobeneren Kreisen eben gehört und was der Frau die Gelegenheit bietet auch ab und zu ihre Abendgarderobe auszutragen) beobachten, während man etwa zehn Meter weiter, jenseits der Straßenbahnschienen etwa ein-, zweihundert Junkies hatte, die entweder mit verdrehten Augen dastanden, im Gebüsch nach irgendwelchen Resten suchten oder sich gerade einen Druck setzten. Das war wirklich ein erstaunlicher Kontrast. Offenbar fanden das einige der Operngänger mit Beziehungen nicht so interessant, denn ich konnte genau in der Zeit, als ich dort wohnte mitverfolgen, wie die Szene verlegt wurde. Zunächst kamen Horden von Polizisten (in Frankfurt sehen die Polizisten aus wie Soldaten: Hose steckt in den Schuhen und Maschinenpistole), die die Horden der Junkies aus der Grünanlage jagte, die Junkies rannten dann die Kaiserstraße

runter, die nächste Straße links, dann auf die Münchener Straße und zurück zu ihrer Grünanlage, wo sie wieder die Büsche absuchen und sich in Ruhe einen Druck setzen konnten. Das ganze wiederholte sich mit zunehmender Zahl mehrmals am Tag, bis dann schließlich die ganze Grünanlage umgegraben und neu angelegt wurde und sich die Drogenszene in die Seitenstraßen und hinter den Bahnhof zurückzog, wo sie nicht mehr so sichtbar war. Eigentlich schade, denn existieren tut sie immer noch. Allerdings gibt es seit einiger Zeit sogenannte „Druckräume" im Bahnhofsviertel. Da kann man hingehen und sich ungestört einen Druck setzen. Dort gibt es auch frische Nadeln, wegen Aids. Die dreckigen Nadeln waren zuvor übrigens die Hauptwaffe der Junkies. Man weiß ja nie, ob sie nicht vielleicht infiziert sind und will damit nicht gestochen werden.

Typisch für Junkies, wenn sie stoned sind, ist, dass sie extrem langsam reden. Etwa so, wie die Leute auf den Lehrbuchkassetten. Eines Tages haben Rolli und ich mal wieder aus dem Fenster gesehen und eine witzige Szene beobachtet. Da waren drei marokkanische Drogendealer. Zwei saßen auf der Straße und einer, offenbar der Ranghöchste, stand. Einer der beiden sitzenden hatte ein Eis, das er dem andern nicht geben wollte, der es aber offenbar gern gehabt hätte. Der stehende schaute sich eine Weile an, wie die beiden um das Eis rangelten, dann sah er wohl die Notwendigkeit sein didaktisches Nähkästchen zu öffnen und einzugreifen. Er nahm also das Eis und warf es in hohem Bogen weg. Nun stand aber genau zu diesem Zeitpunkt ein Junkie (weiblichen Geschlechts und stoned) mit halb geschlossenen Augen an ein Auto gelehnt und es ergab sich, dass ihr das Eis auf das T-Shirt flog und zwar genau da, wo die Busen sind. Der Oberprimat, der das Eis geworfen hatte, eilte zu ihr und versuchte ihr den Dreck vom T-Shirt zu wischen, wobei er ihr natürlich zwangsläufig an den Busen griff. Und genau in diesem Moment geschah es, dass der liebe Gott die Zeitlupe einschaltete, denn nun segelte die rechte Hand der Junkiefrau ganz langsam gegen die Backe des Primaten und sie (nicht die Hand, glaube ich, sondern die Frau) sagte ungefähr in dem Tempo, wie Japaner Englisch sprechen: „P f o t e n w e g d u W i c h s e r."

Natürlich ist das auch nicht alles, was es in Frankfurt gibt. Dort gibt es auch jede Menge anderer Sachen, z.B. Handkäs, Grie Soß, Sauerkraut, Rippschä, Applä (aber wer will schon über Essen schreiben, das ist doch langweilig), den Palmengarten, den Stadtwald, der in der Einflugschneise zum Flughafen liegt (ziemlich laut), den Römer, Bockenheim, schöne Stadtviertel mit schönen Häusern, den Lerchesberg, wo die Bonzen wohnen, das Rödelheim Hartheim Projekt, das Badesalz Theater, viele Kneipen, wo man im Sommer draußen sitzen kann, das Buga-Gelände, wo es genug Platz gibt, um Bumerang zu spielen, hohe Häuser, Sachsenhausen, die Messe, das Frankfurter Rundfunkochester, die Titanic, das Café Laumer, wo seiner Zeit schon Adorno und Horkheimer Kuchen zu essen pflegten, und Vieles mehr. Aber das ist ja alles bekannt.

フランクフルト雑感

最上 英明

フランクフルトはドイツの経済と交通の中心地である。多くの銀行の本店もフランクフルトに集中しているし，とても広大なハブ空港を持ち，日本からドイツへ行く場合でも，最初の到着地はフランクフルトである。ドイツの他の都市に行く場合は，フランクフルトで乗り換えることになるし，また，ここからイタリアやスペインに向かうツアー客も多く，日本からフランクフルト行きの便に乗ると，こうした数多くの団体客と乗り合わせることにもなる。そのため，フランクフルト空港ですぐ降りるという人は，あまり多くはない。空港で荷物を受け取る際も，あっという間に自分の荷物が出てくるので，拍子抜けするぐらいである。私もこれまでは，ミュンヘンやベルリンへ行く便に乗り換えることが多く，フランクフルトで降りることはあまりなかったが，数年前，香川大学がフランクフルトの隣町のヴィースバーデンの大学と交流を始めるようになってから，フランクフルト空港で荷物を受け取って降りる機会も増えるようになってきた。もっとも，フランクフルト市内に行くわけではなく，空港駅から列車ですぐヴィースバーデンに行くので，フランクフルトの町を見る機会は，ここ10年ほどは，まったくなかった。

この春のドイツ行きでは，最初は空港からすぐヴィースバーデンに向かったが，その後，ボンやベルリンへ行ったあと，帰りは帰国の前日にフランクフルトに戻り，オペラを見ることにしたので，10年ぶりにフランクフルト市内を歩くことになった。フランクフルトのオペラハウスは，1982年に初めてドイツへ行った際（パキスタン航空による南回り），私がドイツで一番最初にオペラを見た劇場で，演目はブゾーニの《ファウスト博士》であった（指揮はギーレン）。その後，このオペラ劇場は，放火による火災に見舞われ，しばらくの間は隣りの演劇用の劇場でオペラを上演していたようで，1989年のミュンヘン留学中は，この仮劇場でヴェルディの《オテロ》とブリテンの《夏の夜の夢》を見たことがある。《オテロ》では，最初の場面で松明に本物の火を使い，火事で焼けた劇場なのに，オイオイと思ったものである。《夏の夜の夢》はベルティーニの指揮で，舞台美術が日本人だったからか，しょじょじの庭の狸のような舞台だった印象が残っている。

この3月は，もう既にかなり前からきれいに改築されたオペラハウスで，初めてオペラを見ることができたのも収穫だったが，演目が私の大好きなリヒャルト・シュトラウスの《影のない女》というのもラッキーだった。ちなみに，《影のない女》は，1982年にミュンヘンで接したのが最初で，その後，1984年のハンブルクの劇場による日本初演，1989年のシュトゥットガルト，1992年の名古屋でのミュンヘンの劇場による公演（猿之助の演出で話題となった），2000年のベルリン・ドイツ・オペラ（ティーレマンの指揮が見事だった）に続き，今回が6回目の鑑賞だが，いつ見てもいいオペラである。

今回の上演は，2月の新演出での初公演の際はセンセーショナルな成功を博したものだそうだが，演出も楽しめたし，演奏も期待以上に素晴らしかった。実は，直前にベルリンでラトルとベルリン・フィルによるシュトラウスの《英雄の生涯》も聞いていたのだが，オーケストラのサウンドの厚みという点では，フランクフルトの方が大幅に上回っており，予想以上に重厚なサウンドに大満足であった。フランクフルトのオペラハウスのオーケストラは，正式にはフランクフルト博物館管弦楽団(Frankfurter Museumorchester)というようだが，シュトラウスが指揮をして《ツァラトゥストラ》と《英雄の生涯》を初演したのも，このオーケストラとのこと。シュトラウスというと，ミュンヘン，ドレスデン，ウィーンがゆかりの都市として有名だが，フランクフルトもそれに劣らず，シュトラウスに縁のある都市であることも，今回初めて知ったのであった。

フランクフルト，素通りするにはもったいない都市である。

《影のない女》のチケット

フランクフルトのオペラハウス

(デーゲン氏の文章でも17頁のdas Operngebäude mit viel Glas以下で，この建物に触れられている。

井上一男氏の文章でも22頁にこのオペラハウスへの言及がある。)

ドイツ一昔半

井上 一男

人間の記憶は曖昧なもので、異国の中で1年半ほど過ごした時間は、当初強いインパクトをもち記憶の中に刻み込まれたはずなのに、時の流れとともに様々な出来事が心の中から次第に消えていく事に愕然とします。線上に繋がった記憶が、途切れ途切れの点となった今でも、当時見聞きしたことを、比較的明瞭に思い起こす事ができることもあります。1986年から87年にかけてバイエルン州のヴュルツブルクで仕事をする機会に恵まれた私は、当地の寒く長い冬を過ごす中で、歌劇場に通う楽しみを見つけることが出来たのは大きな収穫でした。

趣味の話ともなると、拙い語学力でも盛り上がるもので、生来音楽を聴く事が趣味であったのが幸いしました。しかしドイツの人々にとって音楽といえばオペラ、オペラ音痴であった私には大きなカルチャーショックでした。人口13万の小さな町でしたが、750席ある市立劇場ではシーズン中週に3,4日は様々な演目が上演されており、オペラ入門者にとって、切符の購入から座席の座り方、はたまた拍手の仕方の基本を学ぶのには大変お世話になりました。車を購入したことにより、行動範囲が広がり近郊の歌劇場に出かける事で、オペラにおける演出の違いやその面白さに目覚め、当地の人々が音楽イコールオペラと表現する意味の、ほんの一端は理解できたような気がします。

隣の州に在るニュルンベルク歌劇場は、居住地から交通の便がよく、好んで出かけた所のひとつでした。当オペラ劇場では、思いもかけないドイツ人の一面を見たことを今でもまざまざと思い起こす事ができます。ウェーバーの「魔弾の射手」が演目の日、序曲が終わり1幕目にはいっても聴衆はざわざわと煩く、世間話をしに来てるのやら、オペラを聴きに来てるのやら判らないような雰囲気で、音楽の本場でもこんな日も有るのかと思ったものでした。ところが同じ劇場でも見聞き上手の聴衆が多い日には、歌手の歌うアリアや動作に対し、細やかな反応を示し、新参者の私には残念ながら拍手の意味やブーイングの意味が理解できない事も多かったものです。いずれにしても、ある意味では非常に懐が深い文化の賜物なのかもしれません。

物見遊山を兼ねおのぼりさん宜しく、ミュンヘンのバイエルン国立歌劇場やウィーンの国立歌劇場にも足を運びましたが、歌劇場の格に負けてしまい落ち着いて歌劇を楽しむ余裕なぞ無かった様に思います。何せ劇場がとてつもなく煌びやかで、座席の表示は劇場によって異なり、手荷

物を預ける場所や手順にも慣れないし、案内人はといえば恰幅の良い年配の紳士が郷土色豊かな服装に身を包み、コンパートメントに分かれた座席では入り口に陣取っている様はなんとなく恐れ多い物があります。

通った劇場で一番心に残るのはフランクフルト市立劇場。ドイツのオペラ劇場の中では戦災のためか珍しくモダンな建築で、オペラの演出も他の劇場で体験した事の無い、現代的でなおかつ格調のあるものでした。当時の主席指揮者はミヒャエル・ギーレン、作り出す音楽は超一級品。舞台や照明さらに衣装の洗練された様を表現する事が出来ない文章力の無さが悔やまれます。帰国して日の浅い頃当劇場が放火にあい、中に描かれてあったシャガールの遺産が消失した事、さらにはこの放火犯が自由買いで当時の東ドイツから亡命してきた若者であり、裏の事情は良く判りませんが、東西ドイツが併合される前の象徴的な事件であったような気がします。

ドイツで生活したのは足掛け 16 年ほど前のことです。日本では十年一昔と言いますが、恐らく時間の流れが穏やかなかの地では十年一日のごとく、今夜も、また明晩も各地の歌劇場では趣向を凝らした様々なオペラが上演され、ドイツを仕事や観光で訪れる諸外国のオペラ音痴をオペラオタクに変貌させるに違いないと密かに危惧しております。

「ドイツ」という言葉に今想うこと

＝とどまるところを知らぬ社会の世俗化にひとこと＝

谷口幸紀

私は今、東かがわ市の小さなカトリック教会の司祭をしています。しかし、55歳で神父になる以前には、ドイツ系、アメリカ系、イギリス系と、外資系の銀行ばかりを渡り歩く国際金融マンをしていました。特に、ドイツのコメルツバンクの12年は一番長く、又思い出深いものがあります。

1974年から1977年まで4年近くデュッセルドルフに住んでいました。初めホーフガルテンに面した古いしゃれた家に、次いでオーバーカッセルの典型的なドイツ人住宅街に住みました。

当時人口の1％が日本人と言われていたデュッセルで、コメルツバンクの看板を背負う唯一の日本人として、日本の銀行や商社やメーカーの出先を顧客とする他、定期的にフランクフルトへ行って国際金融の仕事もしていました。月に一度はインターシティーに乗ってラインの谷間を往き来したものです。新緑、ブドウの収穫、紅葉、そして雪。四季折々のラインの景色は今でも脳裏に焼き付いて離れません。青春時代の甘酸っぱい思い出にも重なっています。

バブルの最盛期に、当時としては破格の高給取りだった私が、なぜイギリスの銀行を最後にバンカーをやめたのか。また、一時は東京の山谷での日雇い労働者生活も経験しながら、結局は宗教の世界に入り、8年間ローマで神学の勉強をし、カトリックの神父になって、今はひっそりと三本松の田舎司祭をしているのは何故か。語れば多くのことがあります。

しかし、それは又の機会に譲るとして、今回は最近のドイツとの接点について触れるにとどめましょう。

この四月下旬、ドイツのミュンヘンをベースに国際的な演奏活動をしているヘンシェルカルテットという若手の弦楽四重奏団を日本に招聘しました。豊橋の日独協会との交流会の案内と一緒に高松公演のチラシが折り込まれていたので、お気付きの方もおられたかもしれません。ヘンシェルカルテットが私との関係で日本に来たのは、3年前に続いて二度目です。東京、神戸、松山などのほか、高松でも県民ホールのアクトホールで4月25日にコンサートが開かれました。双子の兄弟と美人のお姉さんに、その幼友達が加わったユニークなカルテットです。ミュンヘンの名家に育った彼らの楽器は、二台のストラディヴァリウスと一台のグァリネウスを含む総額およそ十億円の代物で、しかも貸与ではなく彼らの個人所有に属すると言うから、大変なものです。

今回高松では、ハイドンの《ひばり》、メンデルスゾーンの第5番、そして蓼沼恵美子さんのピアノを加えたドヴォルザークのピアノ五重奏曲と多彩なプログラムで、大好評でした。前回同様、収益金はすべて東かがわ市にある国際宣教神学院「レデンプトーリスマーテル」の建設に充てられることになっています。

ここで、この「レデンプトーリスマーテル」神学院について一言触れておきたいと思います。カトリックの宣教師・司祭を養成するための神学院が東かがわ市のとらまる山の麓にできたのは2001年春のことでした。現在は、日本人二人を含む24人の神学生が世界14カ国からやってきて研鑽を積んでいます。祖国を捨て、生涯をかけて日本にキリスト教を伝えるために集まってきた若者達で、この彼らについては、なお多くのことを語ることが出来ます。しかし、私は神父で

あっても、この会報の紙面を借りて個別宗教のＰＲをするつもりではありません。ただ、一般論として、日本の社会の「世俗化」ということについて、もう少し考えて見たいと思うのです。

設立当時の大内町の人々は、この神学院の誘致に強い関心を寄せ、ひとかたならぬ協力を惜しまれませんでした。それは、このような学校の存在が、地元の活性化と国際化、ひいては、人々の交流と世界に開かれた情報の発信と受信の拠点になるとの認識があったからでしょう。

「世俗化」という言葉で人は何をイメージするでしょうか。私は、物質的豊かさのみでは人々の心は満たされず、すべてを金銭的な価値のみに還元し切れるものではない、というごく当たり前のことが忘れ去られた社会、それを世俗化された社会と呼ぶのだと思います。

ドイツで経験したこととして、この「世俗化」について分かりやすい実例を話しましょう。私は1990年の9月に一週間ほどベルリンに滞在しました。1989年11月9日のベルリンの壁崩壊からやっと一年余りが経過したばかりでした。そのとき旧東ベルリンのカトリック教会の一人の神父は、実に興味深い話をしてくれました。「ソ連圏に呑み込まれていた頃の東ドイツでは、共産党の無神論の宣伝にも関わらず、貧しい庶民がまだ熱心に教会に通い続けていた。それが、壁が崩壊して西側の資本主義がなだれ込み、コーラやジーンズやシームレスストッキングが自由に手に入るようになると、人々はぱったり教会に来なくなってしまった。無神論的唯物論では破壊し切れなかった信仰心を、資本主義的唯物論が一年で破壊し尽くしてしまった」と。これこそベルリンにおける世俗化社会の幕開けを示す最も顕著な出来事だと思いました。

そしてそのとき、私はふとモスクワでベリヤエフと言う男と交わした会話を思い出しました。彼は、自分のことをベンリヤエフ（便利屋Ｆ）と自嘲的に自己紹介する日本語の達者なロシア人で、確か東京は狸穴のソ連大使館の書記官の息子か何かだったと記憶します。かれは、「谷口さん。大きな声では言えませんがねえ、ソ連の思想教育はもしかして大失敗だったのかも知れないと思うんですよねえ。だって、ピオネールの赤いネッカチーフを首に巻いて幼稚園に通っていたときから大学を出るまで、一貫して無神論の思想をたたき込まれたはずのインテリたちが、50歳を過ぎる頃から恥ずかしそうにポツポツとロシア正教の教会に通い始めるんですからねえ」と。旧ソ連では、貧しさもあって、イデオロギー教育にも拘わらず「世俗化」はさほど進まなかったのだろうと思います。

こと、「世俗化」の度合いに関しては、アメリカよりもロシアよりもドイツよりもどこよりも、日本が最も徹底した先進国であることは、どうも確かのようであります。ベリヤエフと交わした会話をベルリンでの体験と重ね合わせてみると、何とも皮肉な話だとは思いませんか。

茶髪にピアスのイヤーリングをつけ、何とも締まりのない身なりの日本の若者たちを見るにつけても、瞳の澄んだ端正な外国人の若者集団である「レデンプトーリスマーテル」の神学生達の姿は、これが同じ惑星の住民かと目を疑うほど際立っています。彼らは、ひょっとしたら日本の「世俗化」の病を癒す救世主の役割を担っているのではないかと、心密かに期待するものです。

ヘンシェルカルテットの素晴らしい演奏家達が、この若者達を支えるためにチャリティーコンサートを開いてくれたことを報告するとともに、2，3年後にまた招聘するときには、ぜひ日独協会のメンバーの皆さんにも沢山聴きに来ていただきたいと思う次第です。

国際金融業界に身を置き、お金の神様に奴隷のように仕えていた私が、高給を捨てて心の世界へ、魂の自由を求めて信仰の道に入り貧しい田舎司祭になったのも、結局はこの世俗化した社会に対するささやかな抵抗だったのかもしれません。

ドイツ見聞録

2003年4月17日
中尾友紀

滞在期間；2003年3月24日～3月30日

訪問先；24日～26日　バート・ノイエンアール
マリエンタール
ダーナウの森
ボン市内　など
＜ビッツェガイオ様宅泊＞

27日～30日　ケルン市内
フェニンゲン
ワイン街道
バート・デュルクハイム
シュパイヤー
ハイデルベルク　など
＜B&B　ジゼラ泊＞

コンテンツ；　①人々とのふれあいから

②私のドイツ社会観

③私のドイツ文化観

④ドイツワインのこと

⑤日独協会会員としての今後

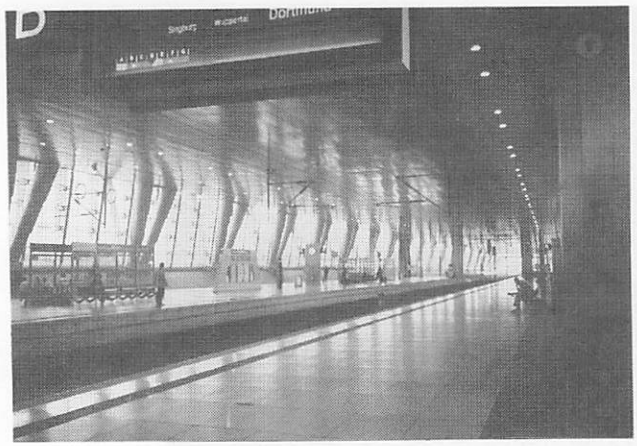
① 人々とのふれあいから

当然といえば当たり前のことですが、どんな場所でも状況でもドイツの方はあいさつをきちんとされるなあというのが第一印象でした。近所ではもちろんのこと、散歩途中ですれ違う初対面の人と、ちょっと入ったお店の人と、レストランでなどなど。「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」という普通のことばさえ新鮮でした。日本では携帯電話メールの普及により（と、私は思っていますが）直接対話の苦手な人達が増えてきました。デートをする男女がそれぞれに携帯メールを打つことに興じていて対座しながら関心は目の前の相手ではなく電波でつながれた他の誰かです。

家族内のコミュニケーションにおいても同様でした。あいさつはもちろんですが、その日あったこと、感じたことについて対話があります。滞在中５つほどのご家族にお会いしましたがどのご家族についても共通して見られたことでした。

移動中、私は１５kg のスーツケースを持っていたのですが初日フランクフルト空港駅で列車に乗るとき、まず「持ち上げられないのでは」と焦りました。ところが私が持ち上げるよりも早く一人の男性がさっと荷物を列車に乗せてくださったのです。その後滞在中は必ず誰かが助けてくれたことに心より感謝しています。実は私も見習って、一度お年よりの荷物を列車から下ろすお手伝いをさせていただきました。日本からの出発は伊丹空港経由成田からでしたが、日本では誰一人として、荷物を持って階段を四苦八苦する女の子を助けてくれる人はいませんでした。私もそれを当たり前に思っていましたので、「手伝うのが当たり前」というドイツでの感覚に刺激をうけました。

年配者はどこでも敬意を払われていました。ファルツでの滞在でお世話になったルレティーフ家では、家族でワインのファミリービジネスを経営していることもあり、８６歳になるおばあさまが家族全員の洗濯から従業員も含めた食事の支度、掃除にいたるまで全ての家事を一手に引きうけていらっしゃいました。お年寄りだから、という言い訳もなく当然の役割としてお元気に務めていらっしゃったお姿に、訪問者の私はもちろんのこと、家族全員が感謝の気持ちを表現し敬う心で接していました。お母様も「料理のレシピはすべておばあさまから。」ということで次回訪問の折には私もおばあさまからドイツ料理をいくつか教わる約束をしてきました。帰国の日、お忙しい皆様の代わりに駅のホームで見送ってくださったこのおばあさまの手のぬくもりが忘れられません。

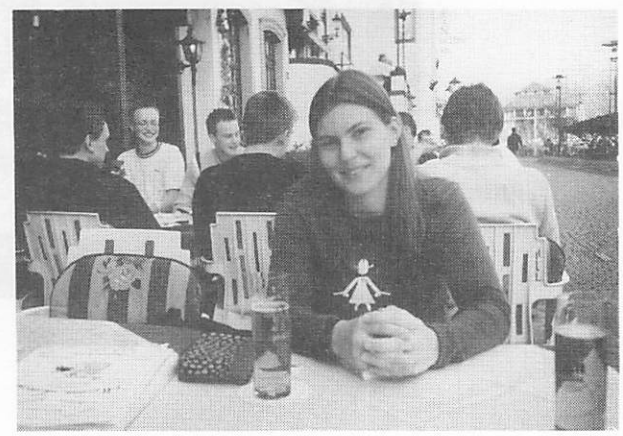


<フランクフルト空港駅>

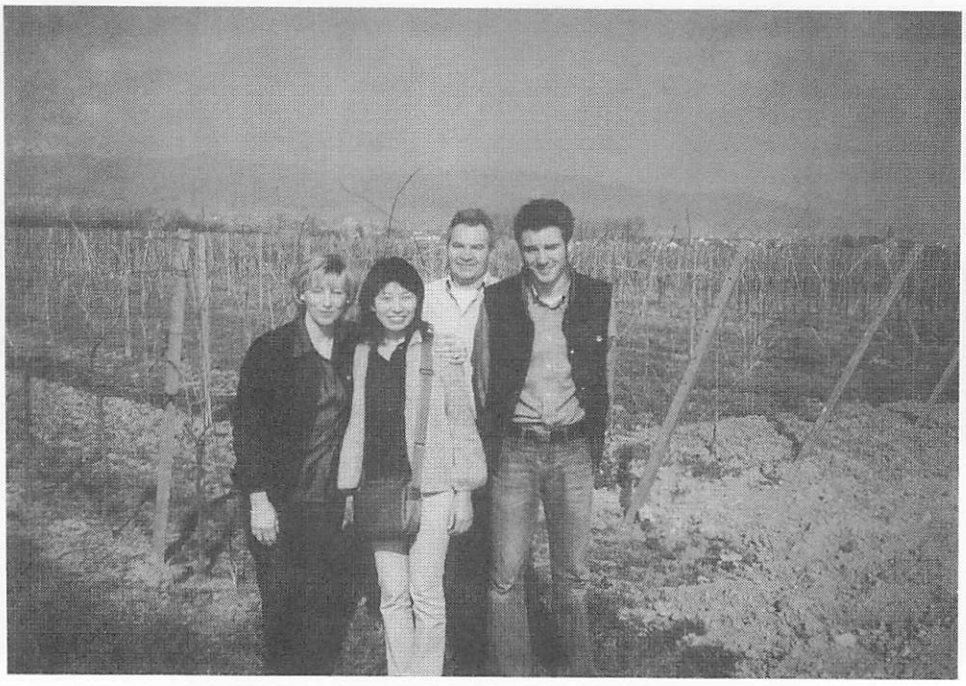
<ビッツエガイオ様ご一家>

<左からシュミット氏、ビッツエガイオ氏、メンヒ氏>

<ボン市内のご案内をいただきました、ブリッタさん>



<ケルン市内をご案内いただきました、ジャネットさん>



<ルレティーフ様ご一家>

<ルレティーフ様ご一家、ニーナさん、ハードリッドご夫妻>

② 私のドイツ社会観

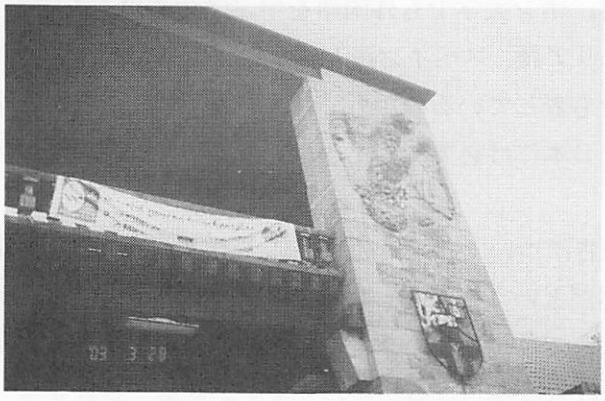
ドイツは日本よりはるかに深刻な不況を迎えていると伝えるメディア。果たして一般の方々の実感としてどの程度まで状況は深刻であるのか、短い滞在の中で感じたことを挙げてみます。

ボン大学を来年卒業予定の彼女。幼い頃からの選抜をくぐり抜けて優秀な成績で大学進学を果たし学問に勤しんだものの卒業後の就職は困難とのこと。大学では日本語を専攻し、一方アルバイトで子ども達に英語も教えているが通訳者・翻訳者としての需要は期待できないと将来に不安を抱いていました。“日本語”という分野自体ドイツではレアな言葉のようです。ボン大学でも外国語を学ぶ学生のほとんどがフランス語を専攻し、ついで英語、イタリア語、スペイン語ということでしたので、これは学生の諸外国に対する関心の高さをも表しているのかもしれません。ヨーロッパの学生達が憧れるような魅力的国づくり、日本には必要でしょう。

また、失業率の高さについてある若い女性によると、そもそも失業者に対する手当てが高すぎるのが問題だということでした。ドイツでも政府より生活保護を受けている人は年々増えているようですが、高い手当てが支給されるため、一旦受給されるようになると「働かなくても収入は得られる」という状況から働く意欲を無くしてしまう人が多いそうです。職業安定所で小さな仕事を紹介されたとしても、無職でいるほうが確実に高い収入を得られることは明らかなため、失業状態を続ける人が後をたたないとか。日本でも同じように失業保険の財政は逼迫していますが、せめて支給期限を設けるなどの措置は必要ですね、という話しをしました。ただ彼女の場合、印象的だったことは「生きがい・生きている意味」は人生においてもお金と同等かそれ以上の価値を持つのではという見解でした。もちろん、働きすぎもよくない。４０年間ただ仕事だけの生活を送ったとしてそのあとに何が残るだろうかということです。休暇も取り、趣味を持つ。リフレッシュすることで仕事に戻ったときにまたやる気もわいてくる。贅沢は必要ないけれど大切なことは心のゆとり、人と人との関係、人間らしい生き方、という点でお互いの価値観が一致する話題でした。

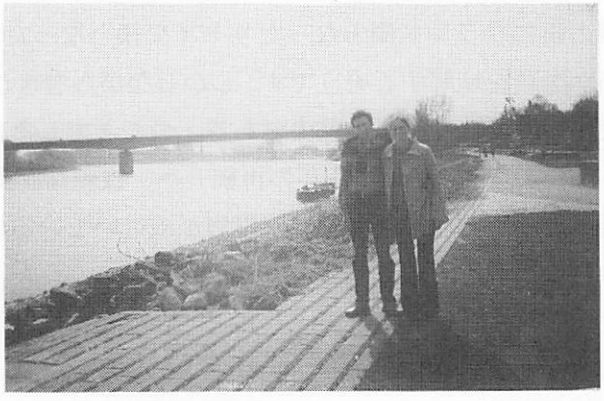
ドイツとフランスの国境アルザスまでドライヴした時に聞いた話です。アルザスの住民は第二次世界大戦の折にフランス領となったりドイツ領となったり二転三転したため、大抵の年配者は両か国語を理解するそうです。しかしながら巻きこまれたこの地方の住民にとっては耐えがたく苦痛な戦禍の歴史であるとのことでした。小国分立から統一そして再び「東西」陣営の分裂から 1989 年の再統一へ。複雑な歴史を歩んできた国民ゆえに現在も反戦活動を始めとして平和を願う思想が根付いているのかもしれません。

<フランスとの国境近く　ワインの門>



<ワインの門　ヒトラーが建てたそうです>

<アルザス地方で>



<ニーナさんとは同じ働く女性として色々な話をしました>

③ 私のドイツ文化観

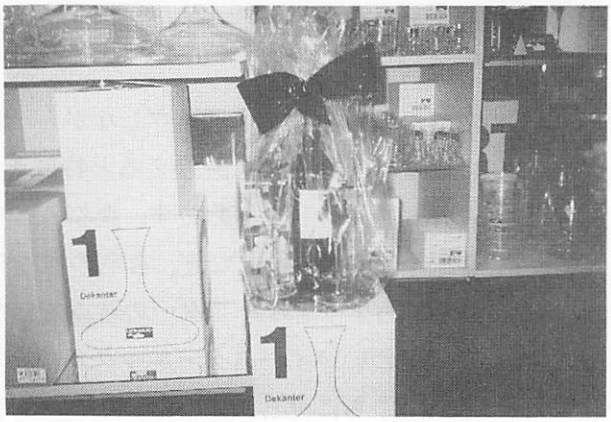
南部ワイン街道をドライヴしながら小さな村をいくつも通り抜けましたが、たいての村ではサマーシーズンを迎えると特徴あるフェスティバルを開催するのが常のようです。５月～９月は目白押しです。栗祭り、ワイン祭り、花火大会、ビール祭り、プレッツエル祭り、花祭りなどなど。自宅の中庭を開放して訪れる人々に食事を楽しんでもらう趣向も。ちょうどイースターの時期でしたので、家々の庭木には子ども達が飾り付けたらしいかわいいイースターエッグが色とりどりに目をひき、うさぎやにわとりのオブジェもあちこちに見られました。町のお菓子屋さんではうさぎ型のチョコレートや卵型のマジパンが定番のようでした。アメリカ文化の流入も盛んでハロウインの祭りなどは昨年から急に盛んになったようです。

宗教はキリスト教が主ですが、カソリックとプロテスタントの違いがドイツに来て初めて視覚的に見えたような気がします。カソリックの教会内は調度品も多く豪華です。ステンドグラスも特徴です。お祈りの時にひざまづくためのひざ置きがいすに備え付けられていました。一方、プロテスタントの教会もいくつか訪れましたが教会内の調度品はほとんどなくシンプルなつくりです。また、お祈りの時にひざまづくこともないようでした。ただし、歴史的・宗教的に両者の違いはもっと深いところにあるようです。

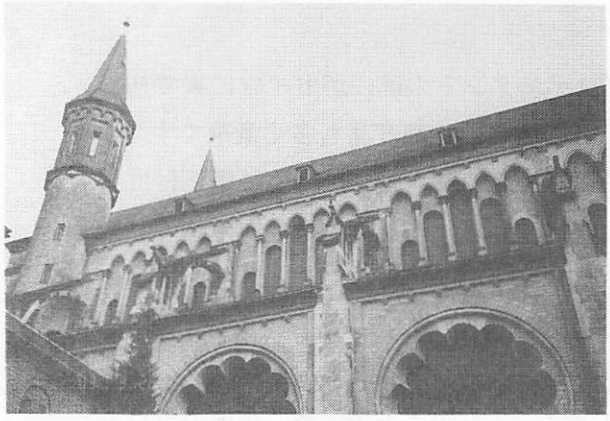
ドイツの食文化において、現在は空前のイタリアブームとのことでした。広場のカフェではキャラメルマキアートやエスプレッソ、カフェモカを楽しむ若者たち。レストランでもパスタやピッツアを出す店は大人気でした。食器類を扱う店にも立ち寄りましたが、「カプチーノ」などと書かれたポップなグラスはすぐに売り切れるとのことでした。次はイタリア語を習いたいという方も。

結婚式を間近に控えた女性に会いました。ウェディングドレスは下が白、上がコーラルピンクのものをオーダーしているとのことでした。日本では招待状に必ず返信ハガキが添えられていますが、ドイツでは出欠の連絡は電話やメールで受けるそうです。お祝いも予めふたりがリストアップしたブライダル・リストの中からプレゼントするという合理的なスタイルです。日本の結婚の習慣を教えると「招待状が来ると恐怖ね」とのこと。当日ふたりは市役所に婚姻届を提出する儀式を済ませ、レストランなどのパーティ会場に向かいます。日本では２時間半が相場ですが、ドイツでは延々翌朝まで、なんていうケースも珍しくないそうです。考えてみれば二人の門出を祝う楽しいパーティに時間制限があるのも不思議な話です。その短い時間を有効に祝うことを目的として、日本では過剰な演出が誕生したのかもしれないと思いました。

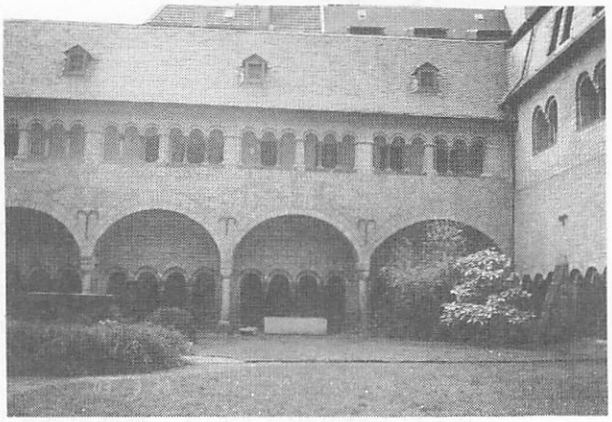
<イースターのプレゼントのアイデア　センスがよい>



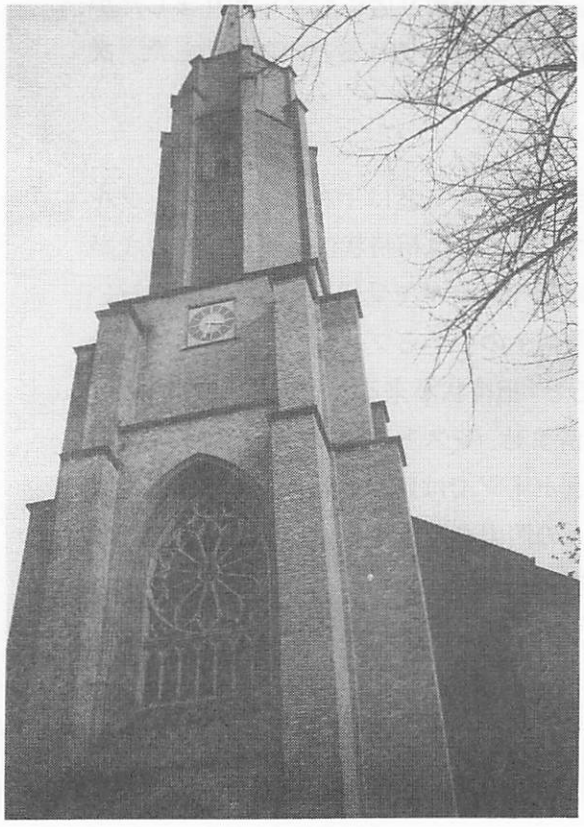
<トランタショップにて>



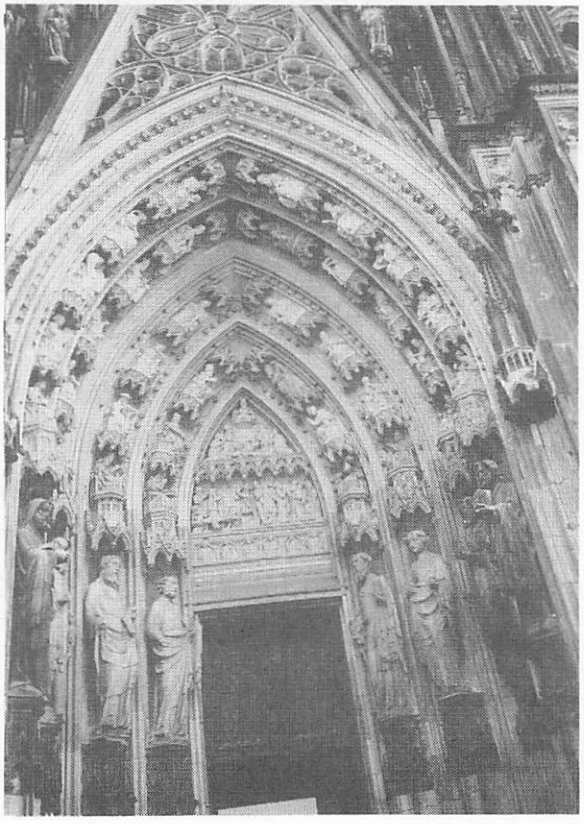
<ボン市教会　カトリックならではの豪華さ>



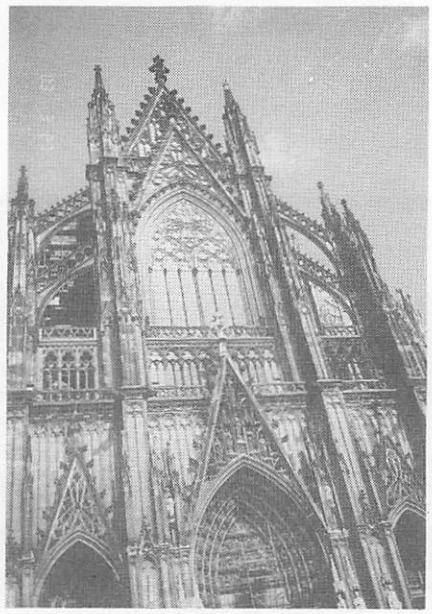
<ボン市教会中庭にて　市民憩いの空間だそうです>



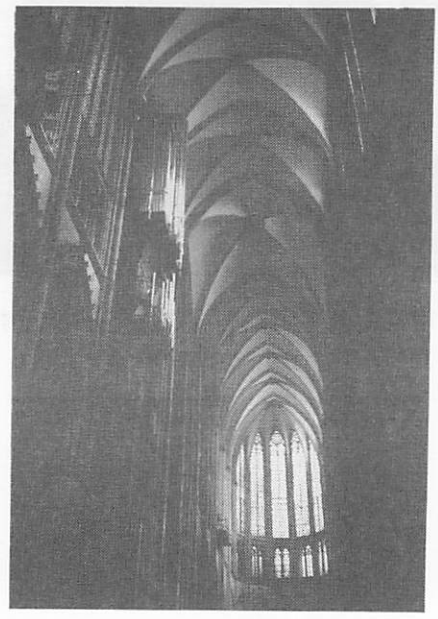
<プロテスタント教会は内部もシンプルでした>



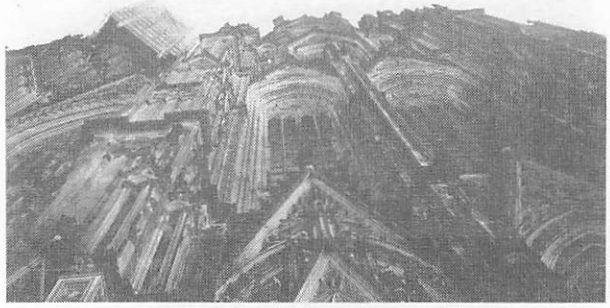
<ケルン大聖堂　驚くばかりの彫刻です>



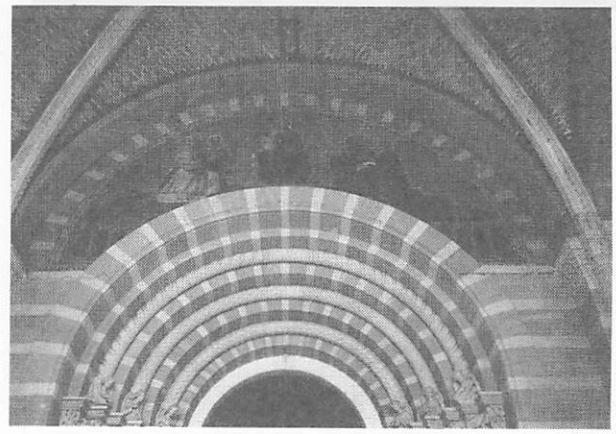
<ケルン大聖堂>



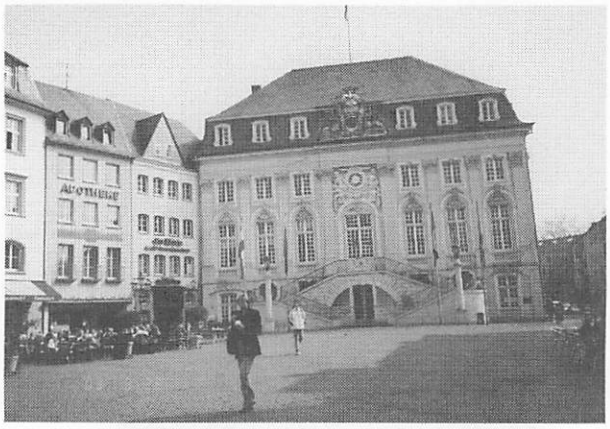
<ケルン大聖堂内部>



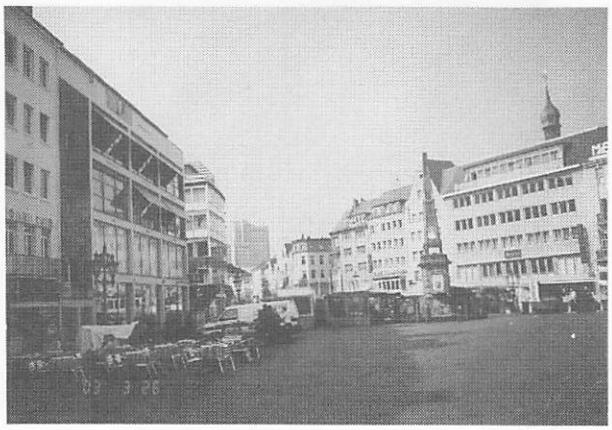
<修復は頻繁におこなわれるとのこと>



<シュパイヤー教会の入り口部分　カトリック>



＜ボン旧市役所前　婚姻届はこちらへ提出する＞



＜写真奥が現市役所＞

＜オープンテラスのカフェでカプチーノを楽しむ人々＞

＜デュルクハイムの大樽前にて＞

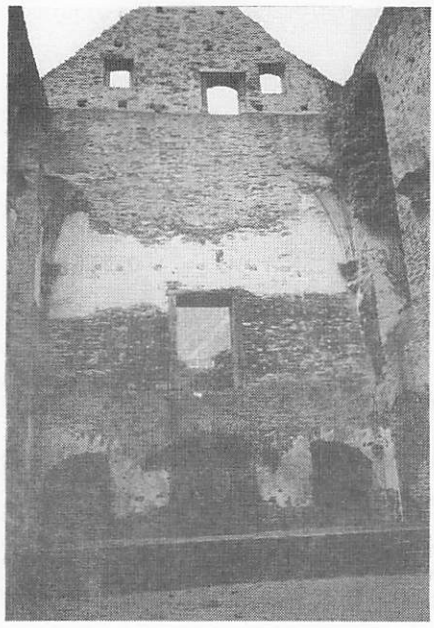
④ ドイツワインのこと

ドイツワインの生産量は全世界のたった２％であるにもかかわらず、その多様性と品質の高さで世界にその名を知られています。今回の滞在ではアール地域とファルツ地域のワイナリーおよびワインを堪能しました。フランスワインと比べていかに厳しい条件のもと純粋なワインが生産されているかを生産者・販売者ともにドイツワインの特徴としてお話いただきました。

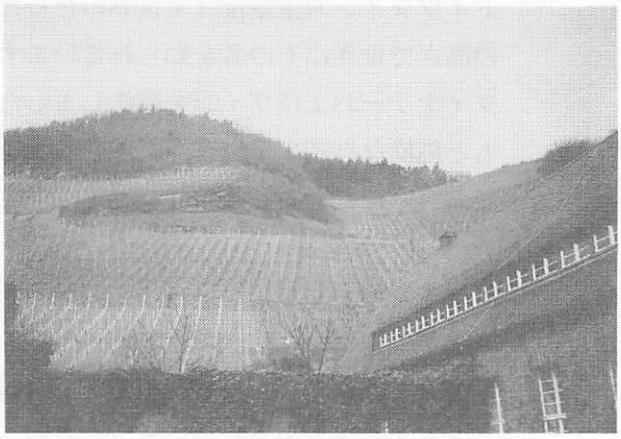
アールではマリエンタール州営醸造所を訪問し興味深く、かなり専門的なことまで伺うことができました。元修道院だったところで１２世紀からの施設や古来の設備機器が保存されており、歴史的にも意義深い醸造所でした。ヨーロッパ全土の品評会で優勝したこともあるほどの品質の高さで生産量も少なく、その年に生産されたワインはほとんど全て売り切ってしまうとのこと。アール地方はドイツでもまれな赤ワイン主体の産地ですが（80%赤、20%白）山々を歩くと、剥き出しになった山肌からのぞくスレートのごつごつした岩盤が、軽くて独特の果実味ある赤ワインを育てていることがわかります。アール河の両岸の険しい斜面に広がるぶどう畑を見ると機械の使えない、人の手によるぶどう栽培がいかに重労働なものであるかを想像するのに十分でした。

一方、ファルツは温暖で風光明媚、ぶどう畑も平地で栽培されていました。畑にも足を踏み入れましたが、南部独特の石灰岩と粘土・黄土のまざった土でやはり量よりも質を重視し、枝は１本のみ残して全て剪定していました。土がとても乾いていたので水やりのことを聞いてみましたが「水は高いので、政府の方針により水やりは制限されている」とのこと。それではよいぶどうは収穫できないのではないかと心配しましたが、ぶどうの根はとても長いので地表は乾いていても十分に地下水をくみあげられるそうです。安心しました。ファルツのワインは軽くて新鮮、マイルドなワインです。ワイン街道をドライヴすると、いけどもいけどもなだらかなぶどう畑が広がり、さすがは生産量においてドイツ国内最多を誇るファルツならではと感動しました。およそ 80 キロにもおよぶワイン街道のほとんどを満喫しました。

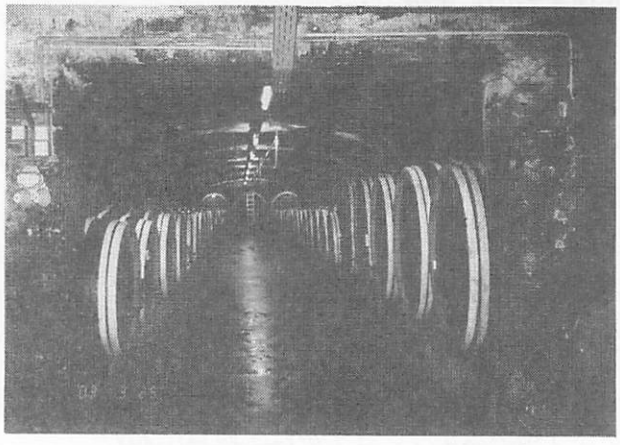
アール地域のバート・ノイエンアールで町の酒屋さんも訪ねました。日本で知られているかどうか分かりませんが、「生産者も飲んでいるワイン」というドイツ語の頭文字をとった格付けのワインがあるようです。酒屋の主が自らの舌で選んだワインリストをもとに、色々なうんちくをうかがいながらワインの品定めをするのはなんと愉快なことでしょう！ドイツはビールが有名ですが、一般家庭ではむしろ、食事どきにはワインを好んで飲んでいるようでした。ワイン１本にも産地の気候・土壌・品種の区別はもちろんのこと背後の歴史まで鑑みればこれほど興味深い飲物はないなあと感動を覚えました。



<マリエンタール修道院跡>



<アール地域は急斜面で栽培されています>

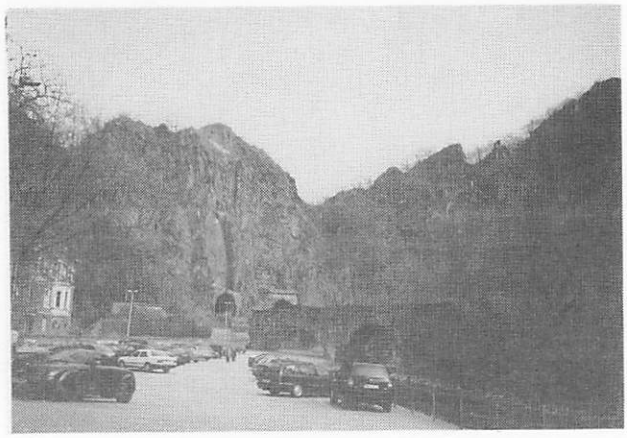


<マリエンタール　赤ワイン貯蔵室>

<低温地下室にて>

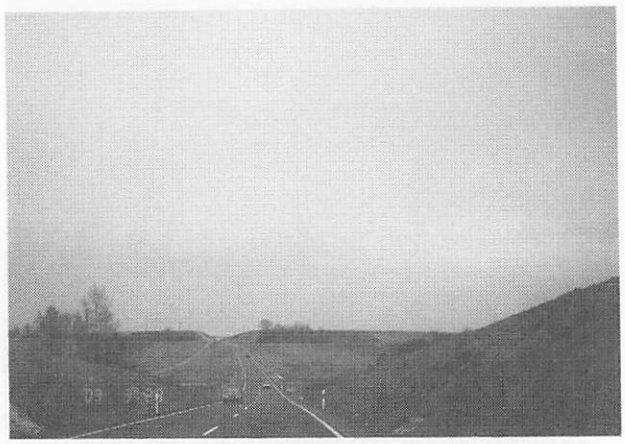
<マイショースの村をのぞむ>

<小さなアール河の流れ>

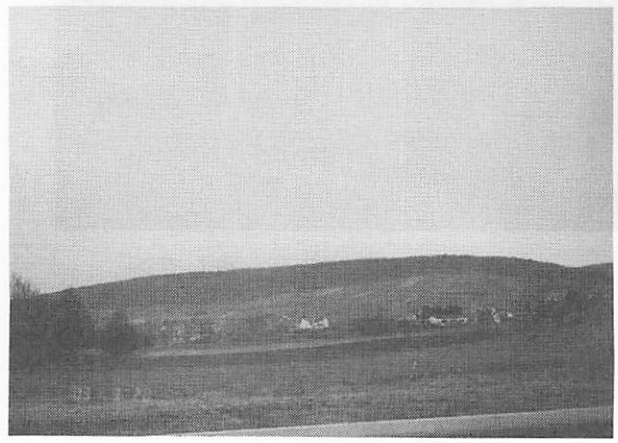


<アール地域特徴のスレーター岩盤>

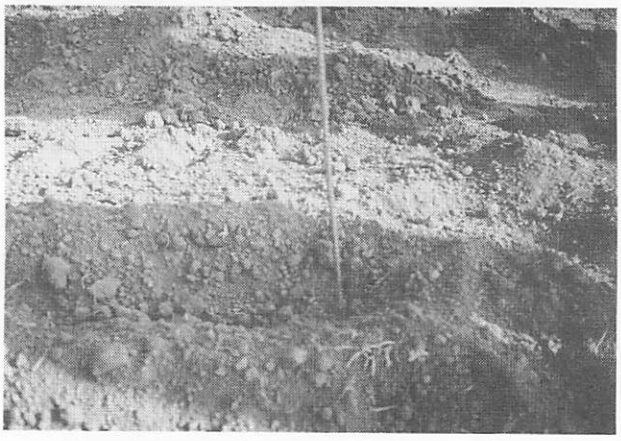
<ファルツ地域　マリエンホーフのケラーは手造りです>



<どこまでも続く南部ワイン街道>



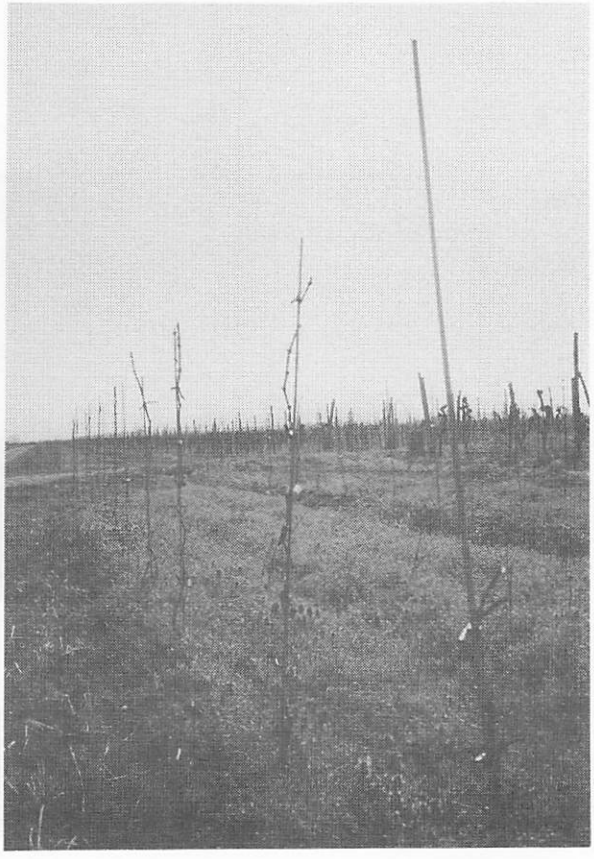
<なだらかな平野で栽培>



＜実をつけるまで３年！寒さ対策のワックスをかぶせて＞

＜南部の特徴　石灰岩と粘土、黄土が混ざって＞

＜わずか１本の枝のみを残して＞



＜５人で半年もかかる大変な手作業です＞

⑤ 日独協会会員としての今後

まず、ボン独日協会会長のメンヒ夫人をはじめ今回の私のプログラム設定から全てご尽力くださいましたドイツの皆様に心から御礼申しあげたいと思います。おひとりおひとりのお心遣いとおもてなしがなければ、私の初めてのドイツ訪問は成し得ないことでした。ドイツ語の知識ゼロの私が使うつたない英語に懸命に耳を傾けてくださり、稚拙な質問にも快く答えてくださいました。わずか１週間の旅ではありましたが、皆様のおかげで感覚的には２週間以上の旅をした充実感に満たされています。

私はドイツリキュールの輸入卸をしたいと計画しておりますが、ビジネスの面だけではなく人間同士の結び付きを重視した友好関係を築いていければ、と思うようになりました。いや、それはむしろビジネス以前の前提条件であるでしょう。

自国の文化の再勉強からはじまり、ヨーロッパ史、ドイツの変遷・文化・言語などが今後の私の課題となりました。楽しい勉強となりそうです。ドイツでの経験がこれからの私の人生に実りある収穫をもたらすよう、日々大切に過ごしていきたいと思います。そしていつでもこのご恩のお返しができますように努めて参りたいと思います。

最後になりましたが、香川日独協会会長中村敏子様、副会長で香川大学教授高木文夫先生、美枝子先生、そして私の出発に際し数々の貴重なアドヴァイスを頂戴いたしました日本側の皆様に心からの感謝をお伝えしたいと思います。

板東の人たち

中村 敏子

同じ四国でおりながら、私たちは鳴門板東のことをどれほど知っているだろうか。漠然とドイツ兵の俘虜収容所があり約１０００名の兵士が大正年間に滞在したとの概略ではないだろうか。そして「第九」発祥の地として。

四国霊場第一番札所・霊山寺をすぎ、梨畠の道を山手にはいるとドイツ館はある。この建物から少し移動した所にふるさとの山河を見づに逝った兵士たちの慰霊碑があり、ドイツ橋も苔むしてある。

板東俘虜収容所は会津藩士の血をひく松江豊寿が所長で、「彼らは国のために戦ったのだから」と蔑視することなく、自由な気質で彼らを見守った。そしてドイツ人俘虜たちにあらゆる分野で活発に活動することをゆるした。ただ彼は時々陸軍省に呼び出されていたようである。が、俘虜たちは地域の住民とよく溶け込み、親しく「ドイツさん」とよばれ、有形無形のおおきな文化遺産を板東に残していった。

帰国後、ドイツで板東の気風を懐かしみ「フランクフルト・バンドー会」と「ハンブルグ・バンドー会」が結成され、やがて板東の古老たちとの交流がはじまり、このことが鳴門市ドイツ館の建設契機になったともいう。

鳴門教育大学と鳴門市の共同研究で「板東俘虜収容所」が今年３月上梓された。プロジェクトがスタートしたのが 2000 年 11 月。足掛け４年の大事業にその心意気と熱意にたいして感動して申し上げようがない。研究成果はＤＶＤ作品にも仕上がっているそうである。

また、ホームページ「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」が開設された。これは丸亀の研究会がエンゲル祭をきっかけに広く情報を発信しまとめるためのものであり、「メール会報」もある。

http://homepage3.nifty.com/akagaki/

平成６年の直木賞「二つの山河」は、著者・中村彰彦が舞台をこの板東収容所におき、 所長・松江豊寿とドイツ兵俘虜たちとの心の交流を、そして望郷の想いを綿密に書いたものである。このたびドイツ語訳が完成している。

Widergespiegelte Heimatwelten　　Berge und Flüsse
(想い出のふるさと)　　(山と河と)

訳者は 徳島大学外国人講師　Dr. Wolfgang Herbert

異境の地でなくなられた方々のふるさとに向かって伝えたかった事々を思うと胸がつまる。この無念の想いを和らげてきた人は、そっと慰めてきた墓守りであろう。高橋春江さんであり小林翁である。このような地道な人の力がここ板東からドイツに向けて大きな友好の輪として広がっている。

ホームステイ報告

In Kagawa:

Julian Joon
Christoph Rodorff
Katja Nordt

In Bonn:

武井　素子

Mein Homestay in Takamatsu

Am 21. September 2002 ging es los für mich nach Takamtsu. Schon um 6 Uhr morgens erreichte mein Bus Takamatsu-eki, wo schon meine ganze Gastfamilie, die Watanabes, samt Hund auf mich wartete. Ich war überwältigt von diesem herzlichen Empfang. Mit meiner Gastmutter hatte ich vor meiner Abreise email-Kontakt gehabt und ich hatte schon damals einen sehr guten Eindruck von ihr bekommen. Dieses hat sich bei unserem ersten Zusammentreffen verstärkt, was wohl auf Gegenseitigkeit beruhte, denn schon bald war sie in die Rolle meiner japanischen Mutter geschlüpft.

Man kann kaum beschreiben, wie nervös und aufgeregt ich vor meiner Abreise war. Zunächst hatte ich Zweifel wegen meiner geringen Sprachkenntnisse. Außerdem hatte ich keinen konkreten Plan für Takamatsu ausgearbeitet, da es über Takamatsu oder über Shikoku an sich nicht sehr viel Touristen-Informationsmaterial gibt. Aber all meine Sorgen wurden mir direkt abgenommen. Die Kommunikation verlief fast reibungslos, da man sich sowohl auf Japanisch als auch auf Englisch unterhalten konnte. Zudem hatte meine Gastmutter schon einen Plan für uns zusammengestellt.

Die Familie besteht übrigens aus meiner Gastmutter Keiko, meinem Gastvater Yuichi, meinem Gastbruder Naoto und dem Hund Miku. Bei den Watanabes hatte ich mein eigenes Zimmer gehabt, was unheimlich schön und geräumig war.

Während meines nur 6-tägigen Homestays, die wie im Fluge vergangen waren, habe ich so viele Sehenswürdigkeiten gezeigt bekommen, wie z.B. Risturin-Park, Kotohira-Tempel, Mannou-Park und Shikoku-mura. Ich bin mir sicher, das dies mitunter die schönsten Plätze der wunderschönen Insel Shikoku sind.

Wunderbar waren auch meine Begegnungen mit den Bewohnern Takamatsus. Alle waren sehr neugierig und interessiert an Deutschland. Ich habe viele Freunde der Familie kennen gelernt, die uns immer direkt zu sich nach Hause eingeladen haben. So bin ich u.a. in den Genuss einer Kalligraphie-Stunde gekommen. Gerade als Ausländer wird man wirklich überwältigt von der Gastfreundlichkeit und Hilfsbereitschaft der Japaner. Sie freuen sich, dass man den weiten Weg auf sich genommen hat um ihr Land und ihre Leute kennen zulernen. Sie fühlen sich dadurch so geehrt, dass sie einen immer beschenken wollen. Teilweise waren mir die vielen Geschenke schon fast unangenehm, da ich nicht genug Geschenke für alle Freunde mitgebracht hatte.

Mein Homestay war auch gerade dadurch so schön, weil ich richtig in die Familie integriert wurde. Meine Familie, insbesondere meine Gastmutter haben sich sehr fürsorglich um mich gekümmert. Ich fühle mich unheimlich glücklich diese herzliche Familie kennen gelernt zu haben.

Auch zu meinem Gastbruder habe ich ein freundschaftliches Verhältnis aufgebaut. Es war bei unseren Konversationen immer wieder interessant deutsche Jugendliche mit japanischen zu vergleichen. Ich freue mich auch schon, wenn Naoto nach Deutschland kommt und ich ihm unsere Sehenswürdigkeiten zeigen kann.
Bis dahin bleibe ich sicherlich auch noch in Kontakt mit meiner Gastmutter, mit der ich von Zeit zu Zeit chatte.
An dieser Stelle möchte ich mich noch mal herzlichst bei der Gesellschaft bedanken, insbesondere Frau Mönch und Herrn Takagi, die mir diesen unvergesslichen Homestay möglich gemacht haben.

Julian Yoon im Oktober 2002

私の高松でのホームステイ

２００２年９月２１日高松への旅が始まりました。朝６時にはもう私の乗ったバスが高松に到着した。そこではホストファミリーの渡部さんご一家全員が犬も連れて待っていました。私はこの心づくしの出迎えに圧倒されました。お母さんとは出発前にＥ－メールで連絡を取っていたので、そのときから私は良い印象を持っていました。これは私たちが始めて会うときに心強いものでお互いに良かったことです。というのはお母さんはすぐに私の日本での母親役に入れたからです。

出発前の私がどれだけ神経質で興奮していたかは言葉には表せません。まず私は自分の日本語の知識を疑っていました。それ以外にも私は高松での具体的な計画を立てていませんでした。高松や四国について旅行情報がとても多いという訳ではなかったからです。しかし、私の不安はすべて直に取り除かれました。コミュニケーションはほとんど問題なくできました。日本語でも英語でも話すことができたからです。それに加え、お母さんはすでに私たちの計画をまとめていました。

それから家族はお母さんのけいこさん、お父さんのゆういちさん、兄弟になるなおとさん、そして犬のミクです。渡部さんのお宅では私は自分の部屋がありましたが、とても綺麗で広々としていました。

飛ぶように過ぎていった、６日間の滞在中私はとてもたくさんのものを見せて頂きました。例えば、栗林公園、金刀比羅宮、満濃公園、そして四国村です。これらはとても美しい島、四国の最も素晴らしい場所なのだと確信しています。

素晴らしかったのは高松の人たちとの出会いです。みんなとても好奇心があり、ドイツに関心がありました。私は家族のお友達の多くと知り合いになりましたが、いつも直接自宅へ招待されました。そんなわけで私は書道の時間を楽しむことができました。外国人として日本人のおもてなしやご厚意には本当に圧倒されてしまいます。彼らの国や人々を知るために遠い道のりをやって来ることを日本人は喜んでいます。彼らは誰かをいつももてなそうとすることで誇りを感じています。時々は私はたくさんの贈り物に危うく不快に思いそうなことがありました。すべての友人にあげるだけの充分な贈り物を私が持ってきていないからです。

私のホームステイは自分が家庭の中に溶け込めたことで本当に素晴らしいものでした。私の家族、特にお母さんはとても親身に私のことを世話してくれました。この家族と知り合いになれたことを私はとても幸福だと感じています。私の兄弟とも親しくなりました。会話の中で何度もドイツの若者と日本の若者の比較が興味深いものになりました。なおとさんがドイツに来て、私が見所を案内できるのが楽しみです。

それまではさらにお母さんと時々チャットしながら連絡を取り合っていきます。

この場を借りてもう一度心から協会に、とりわけこの忘れがたいホームステイを可能にしていただいたメンヒさんと髙木さんに感謝したいと思います。

ユリアン・ヨーン(Julian Yoon)

Christoph Rodorff
Gartenstr. 63 App. 128
53229 Bonn

Homestay Takamatsu bzw. Kanonji
(21.09-27.09.02)

Nach 3 Wochen in Kyoto beginnt ein neues Abenteuer, das schon mit der Bahnfahrt beginnt. Im Shinkansen geht es bis Okayama, wo ich den Zug wechseln muss.

Am Bahnhof holt mich Tachibana Mitsuaki ab. Er arbeitet in Takamatsu, hat aber momentan Urlaub und so ist er während dieser Zeit in Kanonji bei seinen Eltern. Gemeinsam mit diesen, er ist Anfang 30, und seinem Bruder, 28 Jahre alt, wohne ich in einem gemütlichen Haus, das direkt am Setonaikai liegt.

Die Familie war sehr Gastfreundlich, auch wenn es zu Beginn kleinere Kommunikationsschwierigkeiten gab. Ich wurde sehr schnell in die Familie integriert und alle waren sehr interessiert, was ich Ihnen über Deutschland und Europa zu erzählen hatte. Und im Gegenzug lernte ich viel über regionale Gegebenheiten, da sich die Kagawa Region bzw. Shikoku sehr von der Kyoto's unterscheidet. So wurden mir einige Dialektwörter beigebracht, die nur in dieser Gegend gebräuchlich sind.

Ich verlebte 1 wunderschöne Woche in einer eher ländlichen Region, auch wenn ich mir unter ländlich „mehr freie Fläche" vorgestellt hatte.

Unter anderem ging wir gemeinsam mit einem Freund seinerseits, sowie seiner Cousine Bowlen, fuhren nach Matsuyama um dort ein Bad im Dogo Onsen, das ja das älteste Onsen Japans ist, zu nehmen. So kam ich auch fast jeden Abend in den Genuss, den Tag mit einem ausgiebigen Besuch in einem Onsen zu beenden.

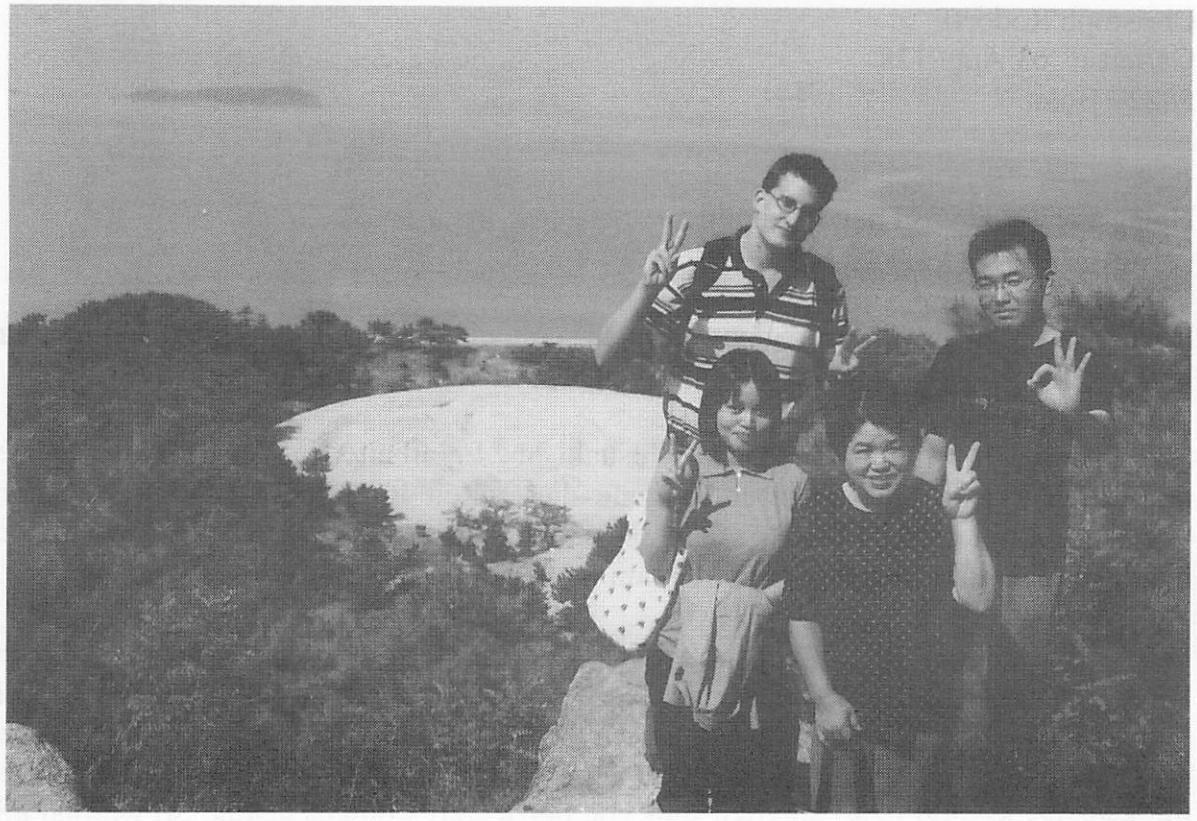
Nach dieser Woche war ich wiederum um zahlreiche Erfahrungen reicher und nahm recht wehmütig Abschied von meiner äußerst netten Gastfamilie, sowie einem außergewöhnlichem Land, das ich noch sehr viele weitere Male besuchen möchte.

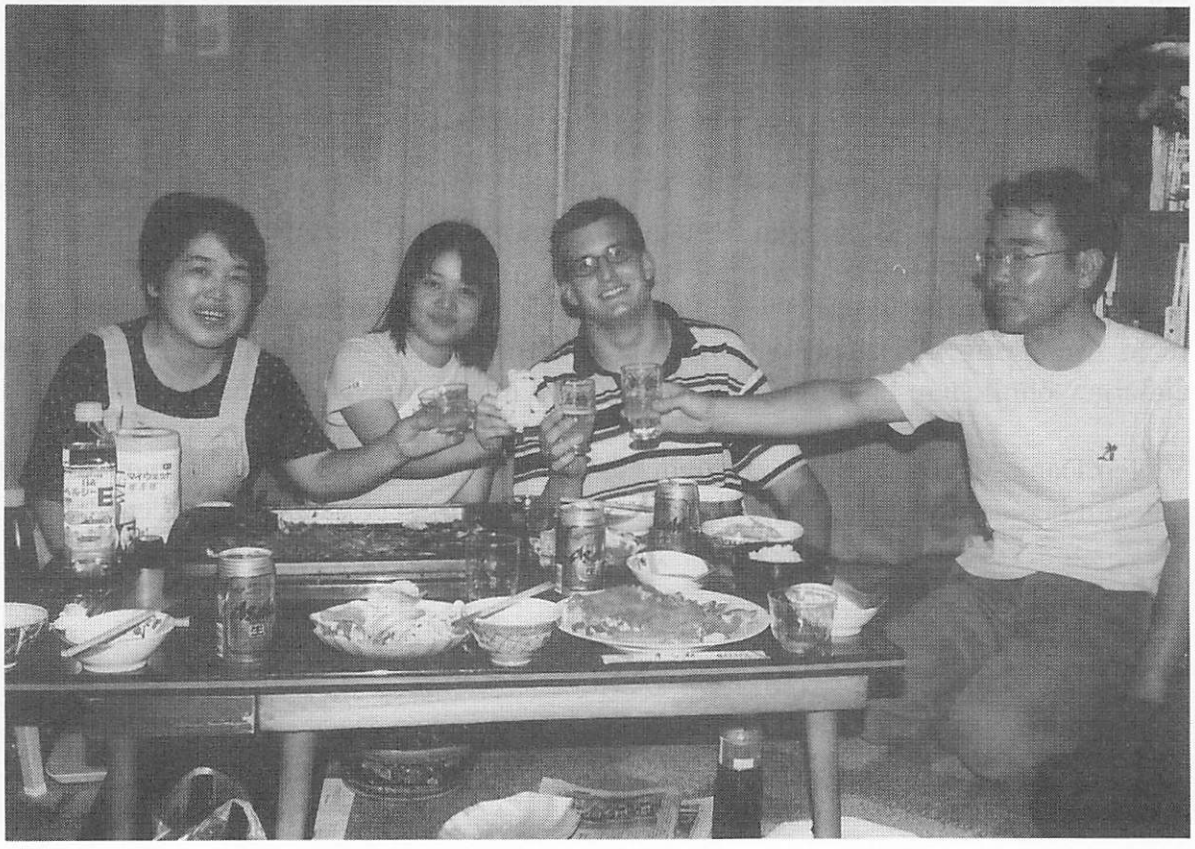
Vielen Dank, dass Sie es mir ermöglichten, das wunderbare Shikoku kennenzulernen, mitsamt beeindruckenden Naturkulissen und sehr aufgeschlossenen Meschen.

Mit freundlichen Grüssen

Ihr

C. Rodorff





高松および観音寺でのホームステイ

（２００２年９月２１－２７日）

京都で３週間過ごした後新しい冒険がもう鉄道旅行で始まります。新幹線は岡山までそこで列車を乗り換えなければなりません。

駅で橘光昭さんが私を出迎えています。彼は高松で働いていますが、ちょうど休暇で、その間実家の観音寺にいます。私は、３０代初めの彼や２８歳の彼の弟さんと一緒に、瀬戸内海に直接面している心地よい家に住むことになります。

最初、コミュニケーションの点で些細な問題がありましたが、家族はとても親切でした。私はすぐに家族に溶け込みました。みんな私がドイツやヨーロッパのことについて語ることにすごく興味を持っていました。その逆に私は地域のことについてたくさんのことを学びました。香川ないし四国は東京とはずいぶん違っているからです。例えば、私はこの地域でしか使われない方言の語彙も教わりました。

この田園地帯で私はとても素晴らしい一週間を過ごしました。私はそれまで「田園の」という言葉を「より遮るもののない広々とした平面」だと理解していたのですが。

中でも、私は彼の友達と一緒に歩き、彼のいとことボウリングをし、松山に行って、道後温泉、日本で一番古い温泉ですが、そこでお風呂に入りました。そんなわけでほとんど毎晩私は一日を温泉にたっぷりと入って終える楽しみを持つことになりました。

この１週間が終わった後私は再びその分だけ体験が豊富になり、極めて親切なホストファミリーと、そしてこれから何度でも訪れたいと思う素晴らしい国との別れなければ成らないのは本当に憂鬱でした。

とても素晴らしい四国を、併せて印象深い自然やとてもうちとけた人々との出会いを可能にしていただいたことを感謝しています。

クリストフ・ロドルフ（Christoph Rodorff）

Takamatsu-Austausch

Shirotori - 21. September bis 30. September

Nach drei Wochen bei Gastgebern in Kamakura und Mito bin ich am 20. September zum ersten Mal mit dem Shinkansen gefahren, denn ich musste halb Japan durchqueren, um nach Takamatsu auf Shikoku zu kommen. Ich kam relativ spät an und da es schon dunkel war, konnte ich die berühmte Seto-Ohashi (Setobrücke) nicht sehen, dafür wurde ich auf meiner Rückreise entschädigt und natürlich hatte mich später meine Gastfamilie zu einem Aussichtspunkt mitgenommen, von dem aus man einen tollen Blick auf die Brücke hatte.

In Takamatsu wurde ich von Herrn und Frau Kanaji abgeholt. Da habe ich auch erfahren, dass wir noch ungefähr 40 km bis nach Shirotori, ihrem Heimatort, fahren mussten. Genug Zeit, um uns im Auto schon etwas bekannt zu machen. Dabei hat sich auch herausgestellt, dass hier meine japanischen Sprachkenntnisse gut gefragt waren, denn meine Gastgeber sprachen nur wenig Englisch. In den drei vorangegangenen Wochen hatte ich mich ja schon an den Klang der Sprache gewöhnen und meine Kenntnisse auffrischen bzw. üben können. Mit meinem obligatorischen Wörterbuch bewaffnet, klappte es so doch recht gut mit der Verständigung.

Die Familie Kanaji hat sich sehr viel Mühe mit mir gegeben, mich in ihr Familienleben integriert und sich viel Zeit genommen, um mir Shikoku zu zeigen.

Frau Kanaji hat mit mir das Shikokumura, eine Art Freilichtmuseum alter japanischer Häuser, besucht, hat mir den Yamashima-Schrein gezeigt und wir sind im Ritsurin, einem berühmten Park, spazieren gegangen.

Sie haben auch eine Grillparty organisiert mit vielen Gästen. Es war sowieso immer viel los bei Familie Kanaji. Zum Abendessen kam oft der Bruder Satomis, der Tochter des Hauses, mit seiner Frau Keiko, die ganz in der Nähe wohnten, und wir haben zusammen gegessen. Es gab extra besondere Gerichte, damit ich möglichst viel von der japanischen Küche kennen lerne (Sukiyaki, Okonomiyaki etc.) und einige Gerichte konnte ich auch bei Restaurantbesuchen probieren. Besonders bekannt ist die Insel für ihre Nudeln (Udon).

Ein Ausflug führte uns nach Naruto, um uns dort vom Schiff aus die berühmten Wasserwirbel anzuschauen. Ein sehr imponierendes Naturereignis.

Der 23. September war ein besonders anstrengender, aber sehr spannender Tag. Frau Kanaji, Satomi und ich sind mit der Fähre nach Shodoshima gefahren, einer vorgelagerten Insel, und haben dort eine Busrundfahrt gemacht, die uns zu den Sehenswürdigkeiten der Insel führte: zum Affen-Center, zu einem Dorf in dem ein berühmter Film gedreht wurde (*24 no Hitomi*),

zum Olivenmuseum etc. Die Nacht haben wir im Hotel verbracht, wo wir so richtig vom heißen Bad mit Blick aufs Meer profitiert haben. Das entspannt.

Am nächsten Tag sind wir zurück gefahren und mit Frau Kanaji haben wir den Konpirasan, einen Bergtempel besucht, zu dem man tausend Stufen hinaufklettern musste, und haben ein altes Kabuki-Theater besichtigt.

Andere Unternehmungen führten uns ins Inselinnere, wo wir im Gebirge eine Hängebrücke, die Kazurabashi, zu Fuß überquerten. Dabei wurde mir schon etwas bange, denn so eine Hängebrücke ganz aus Ranken und dünnen Holzplanken schwankt ganz schön. Unterwegs haben wir uns noch ein Museum zur Fächerherstellung in Maragume angesehen und ein Heike-Haus mitten in den Bergen.

Besonders interessant fand ich einen Ausflug mit Herrn Kanaji zum *Doitsukan* (Deutsches Haus). Dort war Material über das Kriegsgefangenenlager „Bando" auf Shikoku zusammengetragen worden und es wurde das Leben der deutschen Kriegsgefangenen und ihr Zusammenleben mit den japanischen Einwohnern dargestellt.

An diesem Tag wurden wir auch dazu eingeladen, beim Training für ein *matsuri* (Fest) zuzuschauen. Da ich zu einer Zeit in Japan war, in der es nicht so viele Feste gab, war ich über diese Möglichkeit sehr erfreut.

Am 27. September haben Satomi, ihre Schwägerin Keiko, ich und die beiden Hunde Uran-chan und Atomu-chan noch mal einen letzten Spaziergang am Meer unternommen und dann musste ich leider auch schon wieder abreisen. Die Zeit ist so schnell vergangen.

In dieser einen Woche habe ich so viel erlebt, mich dabei sehr herzlich willkommen gefühlt und viel Spaß mit der Familie Kanaji gehabt. Darum nochmal ein ganz großes Dankeschön an meine Gastgeber in Shirotori.

Ich werde mich immer wieder gern an diese Zeit erinnern.

Katja Nordt

高松への派遣

白鳥-９月２１日～３０日

鎌倉と水戸のホスト・ファミリーでの３週間の後９月２０日私は初めて新幹線に乗りました。四国の高松に行くために日本を半分横断しなければならなかったからです。私は比較的遅く到着し、すでに暗くなっていたので有名な「瀬戸大橋」を見ることができず、そのため帰り道で取り返しました。勿論、後でホストファミリーが橋の眺めがとても素晴らしい場所に連れて行ってくれました。

高松で金地さんご夫妻に出迎えて頂きました。彼らの居住地、白鳥まではまだ約４０キロ行かなければならないことは分かっていました。車の中で互いに知り合うには充分な時間がありました。そのとき分かったのは、ホストファミリーは英語が少ししか話せないので、私の日本語の知識が求められていることでした。その前の３週間すでに私は日本語の響きに慣れていて、私の知識をリフレッシュし、練習をすることができていました。必需品の辞書を携えていたので意思疎通はうまくいきました。

金地さんのご家族は家庭の中に私を溶け込ませるのに骨をずいぶん折ってくださり、四国を案内するのにたくさんの時間を使って下さいました。

奥様は古い民家を集めた野外博物館である、四国村に私を連れ、屋島寺を案内して下さり、それから有名な公園である栗林公園を一緒に散歩しました。

彼女はたくさんのお客を呼んでバーベキュー・パーティを開きました。金地家ではいつもたくさんのことがありました。夕食にはすぐ近くに住む、娘のさとみさんの兄弟、奥さんのけいこさんがよく来られ、一緒に食事をしました。そのとき特別な食事が出ました。それは私ができる限り多くの日本の料理（すき焼き、お好み焼きなど）に親しめるようにとのことでした。私はいくつかの料理は飲食店でも味わうことができました。この島は特に「うどん」で有名です。

遠足で鳴門に行き、有名な渦潮を船上から見ました。とても印象的な出来事でした。

９月２３日は特別にわくわくする、しかし、リラックスする日でした。奥様、さとみさん、そして私はフェリーで目前に横たわる、小豆島に渡り、島の名所を回るバスで周遊しました。モンキー・センター、有名な映画の村（『二十四の瞳』）、オリーブ記念館等々。夜は海が眺められる温泉を売り物にしているホテルで過ごしました。緊張がほぐれました。

翌日私たちは家に帰り、私は奥様と山にある神社、金比羅さんを訪ねましたが、１０００段の階段を登らねばなりませんでした。そして古い歌舞伎座を見学しました。

他の計画で四国の奥地に入り、山中で吊り橋（かずら橋）を歩いて渡りました。そのとき私はいくらか怖くなりました。というのは吊り橋はすべて蔓と木板でできていてすごく揺れるからです。途中で私たちはさらに丸亀の「うちわ博物館」を見学し、山中の「平家屋敷」も見ました。

特に面白いと思ったのはご主人と一緒の「ドイツ館」への遠足でした。そこには四国「板東」俘虜収容所についての資料が集められ、ドイツ人俘虜の生活や日本人の地元住民との交流について説明がありました。

この日私たちは「お祭り」の練習見学にも招かれました。私は日本中でお祭りがある季

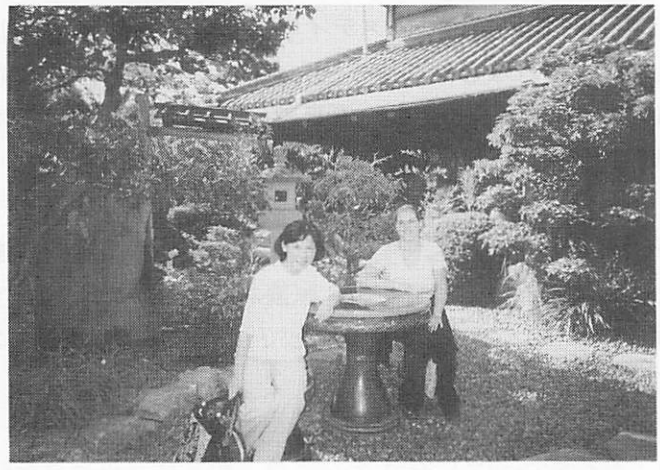
節に来ていたので、この機会をたいへん喜びました。

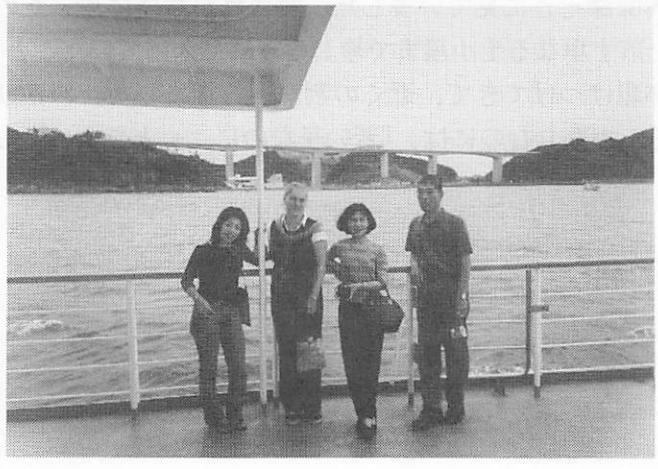
９月２７日はさとみさん、けいこさん、私、そして二匹の犬、ウランちゃんとアトムちゃんはもう一度海辺の最後の散歩をしました。しかし、残念なことにもう旅立たねばなりませんでした。時間はそんなに早く過ぎてしまいました。

この一週間でこんなにたくさんのことを経験しましたが、自分が大歓迎されていることも感じ、金地家の人たちと楽しいひとときを過ごしました。ですから、もう一度白鳥のホストファミリーに大きな感謝を申し上げたいと思います。

私は何度もこの時のことを喜んで思い出しています。

カーチャ・ノルト(Katja　Nordt)





はじめてホームステイを受け入れて！！

金地　喜世子（東かがわ市）

2002年9月20日～27日の7泊8日間、本当に楽しい毎日でした。

会員になって2年余と未だ短いのですが、ホームステイ受け入れ募集を見て考えることは、『ドイツ語はもちろん英語もあまりわからない。そして我が家は高松から遠いので、どこへ行くにも不便だからせっかくの日本滞在時間を有意義に過ごすには気の毒だ。』ということでした。

しかし、今回の申し込みのNordt, Katjaの欄には“日本語―OK、英語―大丈夫”が目に飛び込んできました。そして、ホームステイ中にしたいことは、“香川をいろいろと見てみたい。”とあったので、これならば家族の協力が少しあれば私でも受け入れは大丈夫と考えました。夫・娘に相談したところ、2つ返事でO.Kでした。特に娘は、年齢が近いこともあって大変乗り気で喜んでくれました。

でも、まだ少し不安を抱えながら、担当して下さっている高木様に連絡をしました。すると、「特別なことはしなくていいんですよ。家族が一人増えたと思って、食事と寝る場所を提供してくれるだけでいいんです。」とのことでした。非常に気持ちが楽になり、Katjaが来る日を家族皆で楽しみに待ちました。

9月20日（金）：高松駅へ迎えに行きましたが、顔写真一枚だけを頼りに、改札口で探し出せるかどうか不安でしたが、以外にもすんなりと対面できました。そして高松からは夫の運転で、一路白鳥町の我が家へ・・・着いた日は“すき焼き”で迎えました。（坂本九の歌『すき焼き』がヒント）さしみ・てんぷら等、日本料理は大好きだとのことで、それからの食事は何の心配も要りませんでした。

翌日、21日から27日までのスケジュールは次のとおりです。

9月21日（土）：栗林公園，四国村，屋島神社

栗林公園内の掬月亭でお抹茶を心静かに一服。大和撫子ではなく膝を組んで！　但し、写真を写す時にはきちんと正座しましたよ。

昼食は、山田家でうどんと天ぷらに舌鼓。美味しい美味しいと連発。昼食後は、お庭で写真撮影。山田家の人がシャッターを押してくださいました。

四国村は本当に興味深そうに見ていました。特に私が意外に思ったのは、和紙の原料である三椏や楮の木を蒸す単なる土小屋まで珍しそうに見入っていたことです。

夜は、急遽次男が駆けつけてきて、近くの割烹へ行きました。わさびやみょうが、山椒といった香り物を好んで楽しむのには、「若い子なのに！」とちょっとした驚きでした。

９月２２日（日）：大谷焼、鳴門のうず潮、阿波十郎兵衛屋敷

カティヤと娘・夫・友達・私・ウラン（犬）の５人と一匹で出かけました。香川県内ではありませんが、鳴門のうず潮を見せたいということで、鳴門方面へ出かけました。うず潮の見ごろは１２：４０頃が大潮とのことでこの時間に合わせてのスケジュールとなり、大谷焼や十郎兵衛屋敷を組み込みました。

うず潮見学は、大鳴門橋の展望室からの眺望をと思っていたのですが、大渋滞、とても入場できそうにありません。急遽、観潮船での観潮となりましたが、結果として、渦のまっただ中での観潮は、大迫力を肌で感じることができ大感激でした。十郎兵衛屋敷では、人形浄瑠璃の物語に興味を持ったようで、「次へ行こう？」と声を掛ける程熱心に見入っていました。特に、人形の表情には、特別な感情を抱いたようでした。また、焼き物にも興味があるようで、森陶器店（大谷焼窯元）では、いろいろと質問をしながら「作品」を楽しんでいました。記念に小さなビールジョッキをプレゼントしました。

夕刻から、カティヤの来宅を聞きつけた友人達が駆け付けて来て、楽しいバーベキューパーティとなりました。

９月２３日（月）：小豆島観光（国際ホテルで一泊）

カティヤと娘・私の３人で行きました。小豆島を案内したいと思ったのは、世界一狭い「土渕海峡」を見せてあげたいと思ったからです。あっと言う間に渡ってしまう程狭く、印象に残らないかも知れませんが、でも香川にある「世界一」のものですから。あとは、寒霞渓、二十四の瞳映画村等お決まりのコースを経てお猿の国では、お猿の「あいちゃん」を手に乗せたり、エサをやったりで、一時、童心にかえりました。

９月２４日（火）：玉藻城址、金丸座、金刀比羅宮、書院

小豆島から高松へ帰って、玉藻公園を散歩し、琴平へ向かいました。

金丸座では、地下の人力で動かす「回り舞台」の装置を見て関心していました。見学を終えてホッとしたところ、山の上を指しての質問「あれは何ですか？」に思わず「エッ！」何と私は何回も琴平を訪れているのに「山の上の銅像」まで気が付きませんでした。全く知らなかったので、受付の人に尋ねると、「大久保諶之丞」の銅像だとのことでした。（ついでに、少し、説明を加えて教えてもらいました。）何でも見ようと心掛けているカティヤには、驚きました。金刀比羅宮への途中にある「書院」では、丸山応挙の立派な障壁画が多くありました。日本では、有名で教科書にも載る人の絵だと言うと、「日本で何番目の人か？」と尋ねられ、戸惑ってしまいました。

９月２５日（水）：うちわミュージアム、かずら橋、大歩危、小歩危、平家屋敷

夫の運転で、私とカティヤの３人で行動しました。

扇子を見たいと言ったので、香川県は、”うちわ”だと、丸亀のうちわミュージアムへ行きました。実演コーナーでは、職人さんのすばらしい技（うちわの骨作り）を見学しましたが、むしろ紙（和紙）に興味があると言っていました。（２１日の四国村での事、納得）

かずら橋は、四国村に在るものよりスケールが大きいので、「こわごわ」としがみつきながら渡り終えたようでした。平家屋敷では、じっくりと年代等を確認しながら見ていまし

丸亀うちわミュージアムの職人技に見入る

かずら橋にて

手袋工場の見本の前で

た。日本の古いもの、歴史には大変興味をもっていることを実感しました。

９月２６日（木）：ドイツ館、さぬき和三盆、呉服屋、手袋、しし舞、ベッセルおおち

朝からの雨、夫とカティヤの二人は、ドイツ館へと出かけて行きました。

（後は、二人の話から）

カティヤはドイツ館のことは調べて来ていなかったようでした。展示品、特に古い写真や絵に見入っていました。また、ドイツ人捕虜と地元の人々との交流の再現場面には特別な興味を持って見ていました。

ドイツ館の帰り道、昔ながらの製法を守り続けている「さぬき和三盆製造元、三谷精糖」へお邪魔しました。三谷精糖は私の親戚であるため、色々と丁寧に説明をして下さったそうです。しかし、カティヤの写真撮影は、ストロボの光で住み着いた酵母に悪影響があるとのことで許可されませんでした。最後にはお土産まで頂いて、ありがとうございました。

白鳥の地場産業である手袋を、カティヤのご家族へのお土産にと思い、夫の知人の手袋工場へ行ったところ、工場で、香川県の「無形重要文化財」に指定されている「しし舞」（通称：とら獅子）の練習を行っていました。さっそく、練習を見せて貰ったり、触らせて貰ったりと思ってもいなかった機会に恵まれました。

ベッセルおおちでは、すばらしい夕日を見ながらの温泉に堪能して帰宅し、夕食は長男夫婦も集まり、得意の「お好み焼き」で楽しみました。

私が習っている「日舞」の発表会のビデオを見てもらった時に、「着物を着てみたい」と言うことでしたが、私や娘のはサイズが合いません。カティヤに浴衣をプレゼントすることにし、呉服屋へ行きました。カティヤは、うちわの柄を選びました。しかし、仕立てに４～５日程掛かるとのことで、帯・下駄等を揃えて、後日、航空便で送りました。カティヤ、浴衣を着てみましたか？

９月２７日（金）：別れの日

いよいよ、カティヤが次の旅行先への旅立ちの日です。

娘・嫁と一緒に２人の愛犬（ヨークシャーテリア、オス＆メス）を連れて３人で散歩に行きました。在宅中のカティヤは、時々、散歩に連れて行ってくれました。犬もなついていたので何だか別れが寂しそうに感じました。

さぬき津田駅まで送り、お別れをしましたが、少し寂しい気持ちになりました。

８日間を通して

和英辞典を片時も離さず愛用しました。学生時代にも無かったことでした。歴史に興味をもっていたようなので、我が家が香川県東部に位置することから、一部、徳島県へも足を伸ばしました。少し、欲張り過ぎかな？　と思う日も有りましたが、せっかくなので、あれもこれもとこちらの思いを押し付けたのではないかと、反省もしています。時々、「疲れてないか？」と尋ねましたが、「大丈夫」の返事に気を良くして、私達も楽しみました。

夫・娘に協力してもらい、息子や嫁、友達等、我家へよく集まる人達と、あまり気負う事無く、本当に家族が一人増えたという感覚ですごすことができました。

カティヤありがとう。　機会があれば、もう一度会いたいね。

ホストファミリー報告

ヘルムート・シュレックさんと再会しました 2002/9/15～9/18

香川日独協会学生会員　明神実枝

Email: mieallesgute@hotmail.com

◇シュレックさんと何回目の再会？

◇再会日記

9月15日(日) 神戸日独協会の方々と乾杯！

9月16日(月) ヘルムートの高松再訪

9月17日(火) ショッピングと俳画

9月18日(水) ヘルムート・東京へ出発

◇全体の感想

(写真:9月16日(月) ウェルカム・パーティ:)

◇シュレックさんと何回目の再会？

1年前にボンでお会いしました

2001年9月3日～12日の10日間、母の知人である上島さんご夫婦が私を案内役にご指名下さり、3人でドイツを旅行しました。マインツやリンブルク、カウプなどライン川沿いの町々を訪れた後、ボンに6～9日の4日間滞在し、ボン独日協会の友人達と再会を楽しみました。その時、ヘルムート・シュレックさ

んにはコブレンツからモーゼル川沿い、エルツ城等を案内してもらい、大変お世話になりました。

それから半年後、シュレックさんが日本を訪れると聞き、上島さんご夫婦と私、シュレックさんは 1 年ぶりの再会の時をもつことになりました。今回の来日は和太鼓演奏が主目的だそうですが、時間を作って高松にも立ち寄ってくれることになりました。

実はこれまで２度もホームステイさせてもらっています

私が初めてドイツに行ったのは 1997 年 10 月（大学 3 年時）です。香川日独協会のお世話でシュレック家に 5 日間ホームステイさせてもらいました。2002 年 9 月（大学院 2 年時）には「インターンシップ＋ホームステイ」プログラムに応募した時、ボン独日協会のメンヒ会長が私の履歴書を偶然に見つけたこと等の経緯があって、再びボンのシュレック家にホームステイさせてもらいました。この時は 3 週間もお世話になりました。

今回は私の家族も加わって

今回 2002 年 9 月は、上島さんご夫婦とシュレックさんの再会に加えて、私の家族もシュレックさんと知り合うことになりました。またひとつ、これまでとは異なった、新しい再会の時を持つことができました。

◇再会日記

9 月 15 日（日） 神戸日独協会の方々と乾杯！

ヘルムートの所属するボン独日協会は神戸日独協会と深い交流があり、それならばと神戸日独協会の黒崎先生にご相談し、ヘルムートを囲んでささやかな食事会をすることになりました。

ヘルムートとは 17 時頃に会う約束をしていましたが、なんと、15 時頃に「三ノ宮に着きました」と電話をもらいました。その時、私は神戸日独協会の幹事会に出席していました。ドイツでホームステイをさせてもらって以来、私も日独交流のために何かしたいと思って、神戸日独協会で若者グループ（GNG）の活動に参加させてもらっていた関係で参加していたのでした。幹事会の方々はヘルムートがもう到着しているなら会議の場に一緒にいてもらって構わないと快く言って下さり、ヘルムートも会議に同席してもらうことになりました。ヘルムートは話し合いの内容が少し理解できたようで、「ボン独日協会も同様の課題を抱えている。興味深く聞かせてもらった」と言っていました。

会議の後、ヘルムートを囲んで神戸日独協会の黒崎先生、薬師川さん、杉本さん、GNG の松浦さん、昇さん、墨井さん、桑原さん、私の 9 人で、ろばた焼きの居酒屋で乾杯しました。ヘルムートの流暢な日本語に驚きつつ、楽しいひとときを過ごすことができました。この機会は、今後も日独交流を楽しみたいと思わされた一時でした。

9 月 16 日（月） ヘルムートの高松再訪

高松に到着してすぐに書道教室

午前中は神戸の酒所「灘五郷」を観光して日本酒の作り方を見聞きし、高松には 14 時半に到着しま

した。姉の淳子に運転してもらって屋島周辺をドライブしながら明神家に帰りました。そして少し休憩するなり、私の父による書道教室が始まりました。ヘルムートは日本文化のいろいろなことに興味があり、父に書道を見せてもらうことにしていました。

約一時間半のレクチャーと練習の後、彼は初めて書道を試みたとは思えないような作品を完成させ、私たちを驚かせました。思わず「なぜこんなに上手く書けたの？」と聞いてしまったほどです。ヘルムートは「先生がいいから」とも言ってくれましたが（Danke!）、「難しく考えずに集中して感じるままに挑戦するだけ」とも答え、前向きな取り組みの姿勢を教えられました。

日本式書道とヨーロッパ式カリグラフィーの宿題

ヘルムートは私の父に書道を教えてもらえるということで、ヨーロッパ式のカリグラフィー用具（カリグラフィー書式についての本、ペン、様々な形・太さのペン先、数種類のインク）をお土産に準備してくれました。そして、「ヨーロッパ式カリグラフィーのペンで、漢字やひらがなを書くことも不可能じゃないと思う。まだ誰も試したことはないけれど、きっと面白いものができると思う」というメッセージとともにプレゼントしてくれました。思っても見なかったヘルムートのアイデアに驚きながら、しかし文化は生き物で、2 つの異質な文化から新たな文化が生まれるのだなあと気づかされました。

ヘルムートは日本式書道の宿題を、私の父はヨーロッパ式カリグラフィーの宿題をそれぞれ与えられることになりました。ヘルムートも父も、2 つの文化からそれぞれ異なった文化を生み出すかもしれませんね。巨匠になったりして。未来はどうあれ「これぞ文化交流の醍醐味！」というものを教えてもらいました。

（写真:9 月 16 日（月） 書道に取り組み中）

ウェルカム・パーティ

上島さんご夫婦と私は2001年9月にヘルムートと会って以来、ちょうど一年ぶりの再会を果たすこととなりました。私たちを訪ねて来てくれることを嬉しく思い、「シュレックさんを囲んで、一度みんなで集まろう」ということになり、景色のよい和食レストランで歓迎パーティをしました。景色のよいレストランで食事をすることにしたのは、ドイツですばらしい景色をたくさん見せてもらったお礼にという上島さんのご配慮からでした。

ヘルムートが今回の旅行で和太鼓の講習を受けてきたことに始まって、ヘルムートの日本に対する興味・関心を聞かせてもらったり、2001年9月のライン川沿いの旅、ヘルムートに案内してもらったコブレンツやモーゼル川沿いの思い出話をしたり、会話が絶えませんでした。

（写真:9月16日（月）ウェルカム・パーティ: ）

ついには、「2006年のドイツ・ワールドカップの際には皆でドイツに行きましょう」と盛り上がり、ヘルムートも「喜んで案内します」と約束しました。さらに、ヘルムートは「その前に和太鼓グループ『震太鼓』のコンサートを愛知万博（2005年）の年に日本で開かないかというアイデアが出ているのですが、聴きに来てください」と言い、私たちも「その時はぜひ聴きに行きます」と答えました。夢はどんどん大きくなる一方の、楽しい一時でした。

9月17日（火） ショッピングと俳画

雨の朝

前夜はパーティでしたが、ヘルムートは翌朝ジョギングしようかというタフさぶりで、私は「散歩なら付き合うよ」と言い、散歩することにしました。残念ながら朝は雨が降っており、しかし朝食後は雨が止んでいたので近所を散歩しました。

お抹茶とお干菓子

午前中は上島さんに運転して頂いて買い物に行きました。ヘルムートの日本滞在もほぼ終わりだったので、お土産などの買い物がありました。

中でも驚いたのは、ドイツの友人に頼まれたというお抹茶とお干菓子を買いに行った時です。その友人はお抹茶の缶（大抵 20g入）を 6 缶買ってきてほしいとヘルムートに頼んだそうなのです。「そのドイツの友人という人はそうとうお抹茶が好きで、量からして毎日飲んでいるのかなぁ」と私がつぶやくと、ヘルムートは「これはカイに頼まれたんだ」と言うから驚きました。

そのお抹茶が大量にほしいドイツの友人とは、私たちの共通の友人だったのです。上島さんと私はカイとご主人のヴィリーに、2001 年 9 月の旅行の際にケルンを案内してもらったので、よく知っていました。確かにお茶とお菓子が好きだと言っていたけれど、そこまではまっているとは. . . お抹茶をめったに飲まない私は損をしているのかもしれないと不安を覚えてしまいました。カイとヴィリーがいつか高松を訪れてくれたら、毎日お茶会をしなければ. . .

ワインのソムリエ修行？

午後は上島さん宅で俳画をさせてもらうことになっていました。が、俳画を描く前に、筆の進みをよくするためにワインで乾杯しました。その際、上島さんと私はヘルムートに、ワインをどのように吟味して味わうのかを教えてもらいました。まず色を見て、次にグラスをゆっくり回して香りを確かめ、そして舌の上にワインを少し乗せて息を吸い込んでワインに空気を含ませると、より味が吟味できるとか。

どんなワインかなと考えながら色と香りを確かめるところまでは上手くいくのですが、第3ステップに入ると、息を吸い込むことでワインが口から出そうになったり、ワインを飲んでしまったり。とにかく味を確かめられずじまいの珍道中でした. . . ソムリエへの道はまだまだ長くかかりそうです。

北ドイツの舟歌

ワインを飲みながら、私たちは北ドイツの舟歌のCDを聞いたりもしました。そのCDは、先ほど紹介した、お抹茶好きな私たち共通の友人、カイとヴィリーから上島さんにプレゼントされたものでした。

2001 年 9 月の旅行の際に、ヴィリーが休暇中に買ってきた北ドイツの舟歌を車の中でかけており、それが上島さんの耳にとまったのでした。それがきっかけで音楽の話に花が咲き、それを覚えていたカイとヴィリーは新たにCDをドイツから送ってくれました。共通の友人との思い出を懐かしく思いつつ、そして今も手紙での会話が続いていることを喜びつつ、乾杯に乾杯をしました。

和太鼓演奏会のビデオ鑑賞

ヘルムートは自分達の和太鼓グループ『震太鼓』の過去の演奏会映像を一本のビデオに編集し、そのビデオを上島さんにプレゼントしました。そして早速、ワインを飲みながらこのビデオを見ました。迫力がありつつ日本が感じられる演奏が続き、演奏と演奏の間には日本各地の風景が織り込まれており、それは見事に編集されたビデオでした。

俳画

ソムリエ修行でリラックスした後、いよいよ俳画に取り組みました。上島さんはあらかじめ秋の季節が表現された一句を用意し、お手本を描いて下さっていました。その句は、昼食を取ったうどん屋『わらや』の日本家屋の雰囲気をヒントにできるよう配慮されたテーマでした。おかげで、私たちは2002 年 9 月 16 日の午後に感じた感覚を手がかりに、秋に差し掛かった季節の情景を日本家屋の雰囲気も含めて絵にす

る機会が得られたのでした。

気が付くと、ヘルムートは書道の時と同様、例の集中力でさらっと描きあげていました。私たちは同じひとつのお手本を手がかりに、五感で感じた昼食時の雰囲気と秋の情景を表現しましたが、完成した作品はそれぞれの色使いと配置によって独特の表現になっていました。ヘルムートと私の作品は、ご指導頂いた感謝の気持ちを込めて、"上島美術館"に寄贈させて頂きました(笑)。

(写真:9月17日(火) 上島邸にて:)

打ち上げ?

俳画を書き終えて、再び乾杯しました。というよりも、再び乾杯するために俳画を描いたのでしたっけ?とにかく、ワインに限らず愛媛県の日本酒、大分県の焼酎など、インターナショナルに(と言っても日本とドイツのみですが)お酒の味をああでもないこうでもないと論評しながら、笑いの絶えない午後の一時を過ごしました。

はかま

この日の夜は、明神家に戻ってはかまの着方をご近所にお住まいの宮西さんに教わりました。

ヘルムートは、「和太鼓演奏の衣装を日本のはかまから作りたいので、はかまを買いたい」と事前に言っていました。しかし私たち家族ははかまに詳しくなく、母が友人に相談してみたところ、古いのでよければとはかまをひとつ譲ってくれました。母の友人のご好意でヘルムートにはかまをプレゼントできることになりましたが、しかしまったく素人の私たちは「果たしてどうやって着るのだろうか」とまた頭をひねり、今度はご近所にお住まいで、親子で剣道をなさっている宮西さんに相談してみました。すると、「紐の結び方等の着方を教えにいきましょう」と快く言って下さいました。

そういった経緯で、この日の夜は宮西さんのお嬢さん、高校生のゆきちゃんにはかまの着方を習いました。ゆきちゃんに一回着てもらって観察し、そしてヘルムート自身が挑戦しました。ひもの結び方に加

えて、長さの調節や履く位置など細かいアドバイスをしてもらい、ヘルムートはメモをとりながら何回か着る練習をしました。

その後、宮西さんご夫婦も一緒に、明神家で食事をしてもらいました。宮西さんはご家族・親戚の皆さんが剣道をなさっていることがきっかけで学生時代から剣道を始め、今は仕事の傍ら剣道の指導に従事しておられ、お嬢さんのゆきちゃんも小さいころから剣道を続けているということでした。剣道の話、スポーツの話、ドイツや日本の話で盛り上がり、ヘルムートも私達もにぎやかに楽しんだ一時でした。

9月18日（水）　ヘルムート・東京へ出発

この日は天気のよい朝を迎えました。朝食は、他の日は普段通りのパンとコーヒーでしたが、この最後の朝は母が日本の朝食（ご飯とみそ汁、納豆、卵焼き、サケ、ほうれん草の胡麻和え、大根おろし、きんぴらごぼう等）を用意してくれました。そして、名残を惜しみながらも姉の出勤に合わせて明神家を出て高松駅まで車で連れて行ってもらいました。

◇全体の感想

ホストファミリーの緊張感なく、逆に大いに楽しみすぎて...

ヘルムートを迎えると決まってから約半年間、何をご馳走しようか、布団はどれがいいか、どこにお連れしようか、何をしようか、何を話そうか等、ああでもないこうでもないと“おもてなし”を考えていました。しかし、お迎えしてみると不思議に緊張感なく、逆にヘルムートの興味・関心について話を聞いたり一緒に何かしたりすることが楽しくてたまらない2日間でした。そんな訳で、いわゆる“日本のおもてなし”は完成を見ませんでしたが...

日独ミックスのビッグ・ファミリー誕生

しかし、これだけ楽しい時間になったのは、明神家だけではあたふたしていたのを、上島さんご夫婦、宮西さんご一家が快く協力して下さり、一緒になって楽しんで下さったおかげだと感謝しています。2001年9月にコブレンツ・モーゼル川沿いをヘルムートに案内してもらった上島さんご夫婦は、一年ぶりの再会を果たした今回、逆にヘルムートを高松中、連れまわして下さいました。また宮西さんは、まだ会ったこともない外国人？（ヘルムート）に、はかまの着方を快く教えに来て下さり、一緒に楽しいときを過ごして下さいました。

何よりヘルムートは、嬉しくて大騒ぎする私達の気持ちを理解し、一緒になって快く楽しんでくれ、また私達にいろいろなことを教えてくれました。私自身、2度もドイツ・ボンでホームステイさせてもらってお世話になり、今回はホスト側なのに、しかしまた「お世話になりました」という感謝の気持ちで一杯です。

このように、今回のヘルムートとの出会い・再会は、私達皆にとって昔から知っている友人に会ったかのような、あるいは親戚か家族の1人がちょっと立ち寄ってくれたかのような、不思議な親しみを感じるものでした。

次の騒ぎはいつ起こるやら...

ホームスティ報告

NO. 1

武井　素子

1. ホームスティ期間　：　2001. 11. 16（金）　～　2001. 11. 22（木）
2. ホームスティ先　：　Longさん宅（ボン）
3. ホームスティの目的　：　ドイツ家庭生活を体験することにより、異文化を理解すること
4. ドイツでお世話になった日独協会の方々　：　Mönch 会長
   Longさんご一家
   Felskiさんご夫婦
   Moogさんご夫婦

月日	訪問先等	概要・感想
11／16	成田→フランクフルト→ボン Longさん宅	Longさんご一家は、アイルランド出身のご主人とドイツ生まれの奥様、1歳になるかわいらしい男の子の三人家族でした。また、半年後に新しい家族が増えることを心待ちにしていらっしゃいました。
11／17	ボン市街 ・Universitat Bonn （ボン大学） ・Haus der Geschichte der BRD （ドイツ連邦共和国歴史博物館） ・Beethovenhaus （ベートベンの家） ・Stadtisches Kunstmuseum （ボン市立美術館）	ボンは、ベルリンに首都が移るまで、第二次世界大戦後から首都としての機能を果たしてきたため、発達した交通網等その名残りが感じられました。 マルクスやハイネが学んだボン大学やベートーベンがウィーンに活動の場を移すまで住んでいたという生家もあり、落ち着いた町でした。 ドイツの婚姻は、市庁舎での結婚儀式により、法律婚として認められるが、ちょうど市庁舎前を通りかかった時、結婚式を挙げているところを見ることができました。 市庁舎前のマルクト広場では、朝市がたち、にぎわいをみせており、野菜やパン、ソーセージなどが売られ、生活感にあふれていました。 夜、Mönch 会長がいらっしゃって、一緒にお茶を飲みながら、お話をしました。
11／18	ケルン市街 ・Dom （ケルン大聖堂） ・Romisch-Germanisches Museum （ローマ・ゲルマン博物館）	ドイツの重工業の中心を担うルール工業地帯の影響を受け、酸性雨によるケルン大聖堂の被害は深刻で、かなり黒ずんでいるところが見られました。改修工事も頻繁に行われているらしいです。 日曜日であったので、聖堂の中で厳粛なミサが行われていました。 展示物の中で最も有名なものは、2世紀頃に作られたディオニソス・モザイクで、この地から発掘されました。
11／19	Staatliches Umweltamt Koln訪問 （環境省）	朝、Felski婦人がお迎えに来てくれて、ご主人の勤める環境省に連れて行ってくださいました。 環境省は、企業の活動が環境保護の法律に抵触していないかを厳しくチェックする監督省で、大気汚染、水質汚濁等について調査するLabor もあり、採取してきたサンプルを最先端の機器を使って分析していました。 Ueberschaer 課長が約2時間半にわたって、仕事内容の説明や施設の案内をしてくださった後、環境省の食堂で、Felskiさんご夫妻、課長さん、職場の同僚の方たちと昼食をとり、環境省を後にしました。

月日	訪問先等	概要・感想等
	Supermarkt Felskiさん宅	Felski夫人と一緒に夕食やケーキの材料の買い出しのためマーケットに行きましたが、日本とは違う点がいくつかみられました。例えば野菜や果物は、量り売りされ欲しい分量だけ買うことができること、買い物袋は客が持参することやジュースのビンなどは回収され、わずかではあるがお金が返金されることなどです。 HaselnuBというクリスマスに作る伝統的なお菓子とVaanilleというクッキーの作り方を教わりました。 お茶を飲みながら楽しい時間を過ごした後、近くをドライブしました。 夕食は、ご主人が作ってくださるとのことでしたが、仕事で遅くなり、夕食の準備の時間がなくなったため、３人で近くのレストランに行きました。
１１／２０	デュッセルドルフ市街 ・ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ日本人学校 ・GMR （製本業） ・Eko Kindergarten （幼稚園） ・Feuerwehr D'f Feuerwache 2 （消防署） ・Loffelsend （家具修理） ・REWE （ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ）	1971（昭和46）年に開校し、今年30周年を迎えた学校で、ドイツで一番大きな日本人学校で、児童・生徒数は、小学部548 名、中学部163 名、計711 名で、教職員数は59名です。2001年度の教育方針の大きな柱に、ＩＴ教育推進構想の実現と総合的学習（ドイツ理解学習・外国語・交流）の創造と開発を掲げていました。 訪問した日がちょうど中学２年生の職場体験学習の日であったため、ドイツ人でも普段なかなか入れないような仕事場に案内していただき、見学をすることができました。この職場体験は、ドイツ理解につながる体験的「総合的な学習の時間」として位置づけていました。
１１／２１	Gymnasium Zum Altenforst Troisdorf校 Moogさん宅	この日は、Moogさんにお世話になりました。奥様の勤めているギムナジウム（生徒数700 人、教職員数70人）に案内していただき、奥様の担当している英語の授業を参観させていただきました。 放課後、Moogさんのお宅に招待していただき、伝統的なジャガイモ料理、肉料理をごちそうになったり、この地方だけで作られるというサクランボワッフルの作り方を教えていただきました。
１１／２２		朝、Longさんにボンの駅まで送ってもらい、次の目的のためにフライブルクへと出発しました。

会員のご活躍

第3回 ビッグ・エス 2002年9月7日開催

全国ドイツ語スピーチコンテスト

Big-S 3.Deutsch-Redewettbewerb!!

日頃お世話になっている地域社会への感謝、そしてささやかな国際交流の一助として、また弊社オリジナルワインをたくさんのお客様にご愛飲いただいていることへの感謝もふまえて、第3回 ビッグ・エス「全国ドイツ語スピーチコンテスト」を開催いたします。
ドイツやドイツ語、そして第九が大好きで日頃コツコツとドイツ語やドイツの歌の勉強をされている方に朗報です。その成果を発表する場を提供いたします。社会人の方、第九を練習中の方、主婦や高校生、大学生の方、チャレンジしませんか? ドイツやドイツ語、ドイツの歌へのあなたの想いや経験をぜひ語ってください、聞かせてください!(ドイツ語で!)
また、ドイツ語の勉強を始めたばかりの人の為には朗読の部もあります。是非ご参加ください。

募集及び開催要項

参加者大募集!! 初心者の方には、朗読の部もあります。

参加資格

人で、高校生以上。

開催日時

2002年9月7日(土)13:00~(開演)

場所

鳴門市ドイツ館(一般公開、入場無料)

ホームページ: www.city.naruto.tokushima.jp/germanhouse/index.html

TEL：088-689-0099

は有料となります。

交通案内

● 神戸淡路鳴門自動車道・鳴門インターから約15分・高松自動車道(東向)

● 高速鳴門バス停下車~徒歩(約1分)~鳴門市営バス・競艇場前バス停

~市営バス大麻線乗車(約30分)~ドイツ館下車

● 本数は限られています。

● バスの手配を予定しております。

い(有料)

ご了承ください。

コンテスト内容 の部どちらか一方に

■朗読の部

雑誌や新聞の記事の

ブレーメンの音楽隊

(Der Wolf und die sieben jungen Geißlein)

(Liebhaber in Gestalten)

■創作の部

審査基準

表彰

応募方法

応募用紙は弊社ホームページからダウンロードできます。(www.big-s.co.jp)郵送ご希望の方にはお送りしますので下記申し込み先までご連絡ください。

・朗読の部、創作の部共に、原稿と発表内容を吹き込んだテープ(3分以内)をお送りください。
・A4版用紙にワープロ又は手書きで「ドイツ語」と「日本語」の原稿を添えて、氏名(ふりがな)を明記して下記申し込み先までお送りください。
(朗読の部出場で委員会で用意した題材利用の場合は、氏名(ふりがな)と発表題材名を明記して下記申し込み先までお送り下さい。)
※応募者が規定数を超える場合は原稿及びテープにてプレコンテストを設けます。

参加申し込み締切日

2002年8月6日(火)必着

テープ・原稿提出締切日

2002年8月20日(火)必着

申し込み先/お問い合わせ窓口

〒761-0101 香川県高松市春日町1627-1

TEL 087-843-7711 FAX 087-843-7761

HPアドレス http://www.big-s.co.jp

e-mail info@big-s.co.jp

株式会社 ビッグ・エス「全国ドイツ語スピーチコンテスト」実行委員会

Big-S
3.Deutsch
-Redewettbewerb!!

Als Beitrag zum hiesigen Gesellschaftsleben und internationalen Austausch,sowie zum Dank für alle,die unseren original Deutschen Wein trinken,veranstaltet die Big-S AG dieses Jahr den 3.Deutschen Redewettbewerb. **"Big-S 3.Redewettbewerb in deutscher Sprache".** Wer Deutschland, die deutsche Sprache oder deutschen Wein liebt und schon immer seine Lernergebnisse unter Beweis stellen wollte, fühle sich hier angesprochen!! Für Schüler und absolute Anfänger gibt es einen **Lesewettbewerb.** Dabei sein ist alles!!

Am Samstag,den 7.September 2002,13:00 Uhr

Ⅰ. **Lesewettbewerb:**
A. Rotkäppchen
B. Der Wolf und die sieben jungen Geisslein
C. Liebhaber in allen Gestalten
3 Minuten aus A,B oder C.

Ⅱ. **Redewettbewerb:**
3-minütiger,selbstverfaßter und noch unveröffentlichter Text über Deutschland,die deutsche Sprache,deutsche Sache oder deutschen Wein

Preise: Alle Gewinner erhalten einen Pokal sowie eine Urkunde.
Die Gewinner des2. Preises werden zu einer Wein-Reise nach Deutschland eingeladen.
Alle weiteren Gewinner erhalten einen Warengutschein.

Infomation:
Big-S,1627-1
Kasuga-cho,Takamatsu-shi, Kagawa-ken
Tel.:087-843-7711
Fax:087-843-7761
HP-Adress: http://www.big-s.co.jp
e-mail:info@big-s.co.jp

主催：株式会社 ビッグ・エス　ケーズデンキ　ビッグ・エス　PC DEPOT

協賛：Lufthansa ルフトハンザドイツ航空会社

後援：大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館/オーストリア大使館/徳島県鳴門市/鳴門第九を歌う会/香川第九合唱団/FRIEDENSDORF INTERNATIONALオーバーハウゼンドイツ国際平和村/マインツ大学/関西ドイツ文化センター/在日ドイツ商工会議所/独日文化交流育英会/ドイツ観光局/ドイツ農産物振興会(CMA)/日本カール・デュイスベルク協会/ドイツワイン基金/鳴門日独友好協会/日独協会/香川日独協会/財団法人高松市国際交流協会/パナソニックドイツ/徳島新聞/四国新聞/西日本放送/瀬戸内海放送/岡山放送/四国放送/エコジャ/香川経済レポート/三修社

Veranstalter:**Big-S** AG. THE ELECTRONICS SUPERSTORE K'sdenki THE LIQUOR SUPERSTORE Big-S THE COMPUTER SUPERSTORE PC DEPOT
Unterstützt von:Lufthansa/Generalkonsulat der BRD in Kobe-Osaka/Österreiche Botschafter/Naruto Stadt/Friedensdorf International/Universität Mainz/Goethe Institut Kansai/Deutsche Industrie und Handelskammer in Japan/Studienwerk für Deutsch-JapanischenKulturaustausch in nrw e.v./Deutsche Zentrale für Tourismus e.v./CMA/Carl-Duisberg-Gesellschaft Japan/Japanisch Deutsch Deutscher Weinfords/Gesellschaft Naruto/Japanisch Deutsche Gesellschaft/Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa/Takamatsu Interationole Association/Panasonic Deutschland GmbH/

第3回 ビッグ・エス全国スピーチコンテスト 審査結果

開催日時 ： 2002年9月7日（木） 13:00〜16:00
開催場所 ： 鳴門市ドイツ館（一般公開、入場無料）

■御来賓・審査員（敬称略）

御　来　賓	役　職
ヨハネス・プライジンガー	大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館　総領事
亀井　俊明	鳴門市長
宮本　聡	鳴門第九を歌う会事務局長
田村　一郎	鳴門市ドイツ館長
藤倉　睦男	鳴門日独友好協会会長
中村　敏子	香川日独協会会長
嵯峨山　由範	香川日独協会理事
米谷　繁男	（株）さかえドライ常務
米谷　聖子	米谷　繁男夫人

御　来　賓	紹　介
ヨハネス・プライジンガー	大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館　総領事
田村　一郎	鳴門市ドイツ館長
セシリア・リーズ	留学生
ローランド・シュルツ	国際交流員

■コンテスト入賞者（敬称略）

『今回は総勢40名の応募があり、プレコンテストを勝ち抜いた16名が本選にチャレンジしました。』

賞	入賞者	年齢	出身地	学校名・職業
最優秀賞（創作）	和田　健史	55	徳島県	西日本電気システム
最優秀賞（創作）	佐藤　尚子	24	鹿児島県	鹿児島大学1年
優秀賞	山本　真哉	30	愛知県	図書館員
優良賞	岡橋　智栄美	33	香川県	小学校教員
敢闘賞	前隈　聖子	30	岡山県	山陽学園大学4年
熱演賞	小澤　朋子	20	京都府	龍谷大学2年
努力賞	遠藤　龍子	32	愛知県	主婦
ユニーク賞	古川　美幸	33	香川県	明治製菓
チャレンジ賞	大島　恵美子	20	東京都	松陰女子大学3年

（惜しくも入賞を果たせなかった方にも全員に、本選出場記念のメダルが贈られました。）

【コンテスト終了後のミニパーティー】

コンテスト終了後に行われたパーティーは、コンテスト参加者・来賓・審査員（ドイツ人スタッフなど）・一般来場者を含め約70名が参加する賑やかなパーティーとなりました。

乾杯の後、来賓の方の挨拶から始まり、オランダマイスターが焼く本場のソーセージを食べながら皆それぞれが楽しいひと時を過ごしました。また高級ドイツワインが登場した試飲会では皆、ワインの説明を聞きながら皆舌鼓を打っていました。

パーティー最後のプログラムは、ドイツ語の「ムシデン」を歌い最後を締めくくりました。

皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

ケーズデンキ ビッグ・エスは ドイツ国際平和村を応援します。

子ども達に言ってほしい…

『生まれてきて良かった』と。

戦災で負傷した子供たちを、私たちは全力で支援します。

ビッグ・エス、ケーズデンキでは来店されるお客様につり銭の中から「1円」、募金箱への投入をお願いしています。皆様にとって『わずか1円』『たった1円』でも、私たちのお店に訪れる年間140万人のお客様の7割の方がご協力いただきますと、100万円になります。
そのお金で、被災を受けた自分の国では生き残れない状態の子ども達を治療し、リハビリしているドイツのオーバーハウゼン国際平和村を支援できます。
この国際平和村は、アフガニスタンやアンゴラなど 数10カ国から集まった被災児童を治療しているボランティア活動組織です。
私たちは小さな企業ですが、この大きな取り組みに全力をあげます。社員やその家族はもちろん、関連企業やお取引先様にもお願いしております。
2000年よりこの募金をスタートし、お客様からご協力頂きました募金と併せて当社の利益の一部を毎年秋頃に現地にて贈呈式を行います。
たとえ結果的に不自由な身体になったとしても、子ども達に
「生まれてきて良かった」と言ってほしいのです。
皆様の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。

㈱ ビッグ・エス
社員一同

平成13年11月26日オーバーハウゼン・ドイツ国際平和村へ皆様のご厚情を直接お渡しして参りました。
皆様のご支援。ご協力、重ねて心よりお礼申し上げます。

引き続き、皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

●ドイツ国際平和村と募金活動につきましては、弊社のホームページをご覧ください。
http://www.big-s.co.jp

募金箱はビッグ・エス、ケーズデンキに備えてあります。

下記口座にて郵便振込でも受け付けております。

口座番号	口座名称
01640-3-23611	ビッグ・エスドイツ国際平和村募金口

当社ホームページに、募金額を掲載しております。（随時更新）
（http://www.big-s.co.jp）

Eine Million Yen für das Friedensdorf Oberhausen

Japanischer Geschäftsmann überbringt Spende

Japaner galten schon immer als besonders einfallsreich. Dies bewies einmal mehr der japanische Geschäftsmann Yasuhiko Osaka. Er hatte eine ebenso einfache wie erfolgreiche Idee, um das, im Land der aufgehenden Sonne durch diverse Fernsehsendungen sehr bekannte, Friedensdorf zu unterstützen.

In allen Filialen seines Elektrogeschäftes stellte er neben den Kassen Sammelbüchsen auf und bat die Kunden, vom Wechselgeld jeweils einen Yen für die Kinder des Friedensdorfes zu spenden. Ein Yen, das ist etwas weniger als ein Cent. Eine sehr kleine Summe, die aber gerade deshalb (fast) jeder gerne gibt.

Und so wandert in seinen Geschäften jeden Tag Yen für Yen in die Sammelbüchsen. Mittlerweile zwei Millionen Mal. Immer, wenn eine Million Yen (umgerechnet rund 8 200 €) zusammengekommen sind, überbringt Yasuhiko Osaka die Spende persönlich - im letzten Jahr zum ersten und vor wenigen Tagen zum zweiten Mal, diesmal in Begleitung seiner Frau und einiger japanischer Freunde, die sich ebenfalls über die Arbeit des Friedensdorfes informieren wollten.

Und für das nächste Jahr hat sich Herr Osaka bereits jetzt etwas Neues vorgenommen - die Spendensumme zu verdoppeln.

Seine Visiten im Oberhausener Friedensdorf verbindet Yasuhiko Osaka immer mit weiteren Besuchen in Deutschland, denn hier hat er viele alte Freunde. Vor fast vierzig Jahren hatte er sich aufgemacht, um als ganz junger Mensch etwas von der Welt kennen zu lernen.

Fast ohne Geld schlug er sich mit zahlreichen Aushilfsjobs durch und legte die meisten Strecken trampend zurück. Immer auf die freundliche Hilfe von wohlwollenden Menschen angewiesen, führte ihn seine Reise damals durch halb Europa bis zum Nordkap, aber Deutschland hatte es ihm besonders angetan. Hier verbrachte er die meiste Zeit und lernte unter anderem am Goethe Institut in Radolfzell die deutsche Sprache, die er bis heute hervorragend beherrscht.

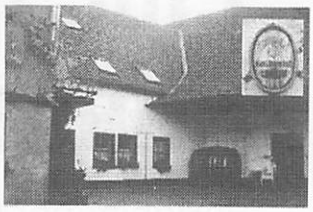
Und diese Hilfen, die er als junger Mensch fern der Heimat erhalten hat, gibt er heute, als mittlerweile gut situierter Geschäftsmann, auf vielfältige Weise zurück, unterstützt junge Ausländer, die seine Heimat bereisen möchten.

Osaka war Mitbegründer und engagiert sich in einer deutsch-japanischen Gesellschaft, fördert die deutsche Sprache in Japan und sammelt Spenden für Menschen, denen es schlechter geht als ihm. Zum Beispiel für die Kinder von Friedensdorf International.

Yasuhiko Osaka aus Japan: ein „hilfreiches" Beispiel, das Schule machen könnte.

Yasuhiko Osaka (4.v.l.) übergibt den symbolischen 1 000 000-Yen-Scheck für die Kinder des Friedensdorfes.

～「ドイツ手作りワインの旅」から ～



第3回ビッグ・エス全国ドイツ語スピーチコンテストで最優秀賞に贈られる「ドイツ手作りワインの旅」を手にした和田健史さんと佐藤尚子さんの2人は、去る平成14年11月27日、4泊6日の旅を終えて、無事帰国しました。

今回の旅は初日、2日目を、ビッグ・エスオリジナルドイツワインのワイナリーのひとつであるフーフ家でホームステイを体験。

ここでは手作り料理と新酒のワインでもてなされ、お返しに和田さんたちは、ドイツの旅を勝ち得たスピーチコンテストでの発表作品やドイツ民謡の歌唱などを披露しました。

また、フーフ家からライン河を一望できる丘へは車で5分の距離。この日は夕日に染まりゆくラインヘッセン地方を眼下に、そこに横たうライン河の美しい流れに、日本からの訪問者たちは暫し言葉を忘て眺めいっていました。

ドイツ滞在3日目、ケルンからデュッセルドルフに移動し、終日自由行動となりショッピングや観光を満喫しました。

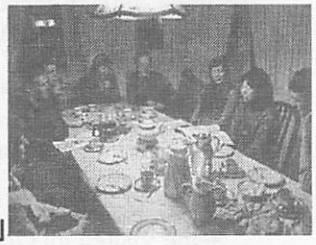
翌日オーバーハウゼン国際平和村での募金贈呈式に参加し、スタッフと平和村事務局に100万円の滞在最終日の26日、フランクフルトで過ごした後、午後のルフトハンザ機でドイツを発ち、帰国の途に着きました。

和田健史さんのお便りから

鳴門市に住む私は、ベートーベンの「第九」がきっかけで、合唱団のサポーターの一人として、姉妹都市のリューネブルクを訪問、そこでの感動がきっかけとなってドイツ語を学び始めました。会話で多少の不安はあったものの、空港に迎えにきていただいたペーターさんの「Guten Tag!」の第一声と堅い握手で私の「手作りワインの旅」が始まりました。

ライン河が眺望できる丘で、ワインで乾杯。この味は一生忘れることはありません。フーフ家でのワインクイーンを交えての歓迎会、ハイデルベルク城の見学、国際平和村への贈呈式への参加など4泊6日のこの企画で、国際親善、観光、語学研修、そしてこれからの人生についてヒントが掴めたような気がします。（抜粋）

佐藤尚子さんのお便りから



外国へ行くことが自体が初めてであり不安でしたが、優しいホストファミリーの皆さんに囲まれて理解しあうことの大切さを学びました。平和村の子供たちは、どの子もかわいらしく、一所懸命に暮らしている姿がとても印象的でした。早く親元で健やかに暮らせる日が来るのを祈りました。

この旅の「手作り」は実は「ワイン」作りを体験するのではなく、自由行動を含めて自分たちの旅を自分たちで作り上げていく「旅」であることに気づきました。色々と失敗もありましたが、本当にたくさんのことを学んだ、充実した旅でした。直接お世話になった方々、そして協賛していただいたルフトハンザドイツ航空会社、各方面で支えてくださった皆様に感謝いたします。（抜粋）

ドイツワインのワイナリーから３人のドイツ人がビッグ･エスを訪問しました!!

株式会社ビッグ･エスが直輸入、販売を手がけているオリジナルドイツワインのワイナリーから３人のドイツ人がビッグ・エスを訪問しました。

株式会社ビッグ・エスに、このほどドイツから3人の友人が訪れた。弊社のオリジナルワインのワイナリーである、マンツ家からベルナ・マンツさん、そしてフーフ家からペーター・フーフさん、カリン・フーフさんの3人。

ビッグ・エスオリジナルワインは1995年に第一回目の輸入をスタートし、当初仕入れ本数は1080本であったが、各店舗での販売及びインターネット通信販売などで少しずつお客様の支持を得て最近では年間に仕入れ本数が30000本を越えるビジネスに成長した。

今年度は新たに「ドイツワインの樹」というワインの木の会員制オーナー制度をスタートさせた。

3人は数日間かけてお酒のビッグ・エス各店舗や家電との複合店のケーズデンキを見学し、ワイン売り場づくりのアドバイスや、実際に店頭に立って、店舗へ来店するお客様に自分たちが造ったワインのPRをした。

また、各店舗スタッフとの記念写真撮影や日頃のお礼を兼ねてコミュニケーションを図った。自分たちが販売しているオリジナルドイツワインの造り手に初めて会ったスタッフは「地球の反対側の友人に会えて感激しました。これからもオリジナルドイツワインを大切にそして沢山販売出来る努力を続ける」と今後の意気込みを語った。

スケジュールの合間で、高松市鬼無町の盆栽の見学やビッグ・エスがインターネット通信販売を行っている香川県の銘酒「勇心」の酒蔵見学等を行った。「勇心」では自分たちのワイン造りに通じる部分を少しでも発見し改善を取り入れようと熱心に質問をした。

また、本社会議室において開催された、お酒のビッグ・エス各店舗より店長が集まって行われた店長会議に参加。店長会議では、今夏輸入された20本近い新種ワインの試飲会を行った。

同席した3人は、ワインの説明を交えながら、会議に参加した店長からの質問や要望に熱心に答えていた。

会議は実りあるものとなり、建設的な意見の中から、今後のワイン造りの改善点の糸口をつかみ、秋以降のドイツワインの輸入に向けて、最良のミーティングとなった。

栗林公園や屋島等も観光し、讃岐うどんにも舌鼓を打った。

約1週間の滞在後、高松を発ち、関西方面を観光したあと、全体で2週間の日程を終え帰国の途に着いた。

会員制

第2回 ドイツワインの樹

2.Ein deutscher Weinstock

年会費 1口10,000円 税込

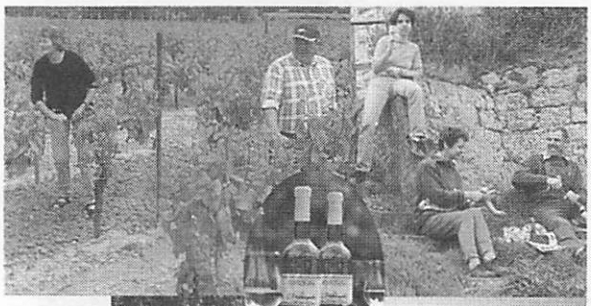
Der jährliche Mitgliedsbeitrag beträgt 10,000 Yen pro Einheit (incl. Steuern)

あなただけのドイツワインの樹のオーナーになりませんか?

Möchten Sie nicht Besitzer eines eigenen Weinstocks in Deutschland werden?

収穫後、あなたの樹のブドウで造った白ワイン をお届けします。

Wir liefernen Ihnen nach der Ernte den Weißwein ihres eigenen Weinstocks.



ペーター・バルツホイザー Peter Balzhauser

ベルナ・マンツ Werner Manz

カールペーター・フーフ Karl-Peter Huff

ドイツワイン 3人の作り手たち!!

Die drei deutschen Winzer

次々金賞ワインを生み出す、まさにドイツワインのマイスター。
きらめく3家の人達!
その歴史の中で代々語り受け継がれたワイン造りの技をご期待ください!!

2002/2003
ラインヘッセンワインプリンセス
レベッカ・シュビッテさん

ドイツ有数のワイン産地ラインヘッセン地方のワイン農家3家(マンツ家、フーフ家、バルツホイザー家)のぶどうの樹3本分のオーナーを毎年限定で募集しています。

樹の成長と収穫を楽しみ、自分だけのワインを味わってみませんか?

ドイツはワインを造る国の中で最も北の北緯50度圏に位置する国でライン川に沿って産地が集中しています。

その中でも、ラインヘッセンは、現在ドイツ最大の栽培面積を持ちます。

土壌と気候が多様なため、品種はシルヴァーナ、リースリングなどバラエティーに富んださまざまなワインが造られています。ここは温暖な気候で地形の傾斜が平らな為に「柔らかな果実風味でまろやかな口当たり」が特徴で、誰が飲んでも抵抗のない安定したワインを産出します。

会員様に香り高い美味しいワインをお届けしようということで、この企画が始まりました。

Jeder Personen konnen jeweils einen Weinstock von drei verschiedenen Weingutern in der Rheinhessen,einem bekannten Weinanbaugebiet Deutschlands, erwerben. Sie haben die Freude, das Heranwachsen des Weinstocks und del Ernte mitzuerleben und können dann ihren eigenen Wein geniessen.
Der Weißwein von Rheinhessen ist dank des milden Klimas der Gegend für seinen vollen Geschmack bekannt.
Wir haben diese Kampagne gestartet um Ihnen diesen Wein naherzubringen.

美味しいワインのお届けは2004年初夏の予定

2003年 2003 Jahr

1 剪定 Trimmen

2 3 5 6 7

お便り vol.5 4

発芽 Keimung

お申込開始 Anmeldung

お申込後の流れ

"Wie es nach der Anmeldung weitergeht"

開花 Blüte

お申込み締切り Anmeldeschluss

お便り vol.1

2004年 2004 Jahr

8 9 10 11 12

発芽 Keimung

収穫 Ernte

お便り vol.2

お便り vol.3

瓶詰め Flaschenabfüllung

FRIEDENSDORF INTERNATIONAL

株式会社ビッグ・エス では、この「ドイツワインの樹」の収益の一部を、オーバーハウゼン ドイツ国際平和村に寄付いたします。

Die Big-S AG spendet einen Teil des Gesamtertrags an das Internationale Friedensdorf in Oberhausen.

(詳しくは弊社ホームページをご覧ください。)

*平成13年12月23日「世界ウルルン滞在記」にて紹介されました。

ホームページアドレス http://www.big-s.co.jp

お申込み方法 お申込み方法などの詳細は裏面をご覧ください。うれしいお申し込み特典もあります。

*Die Einzelheiten für Anmeldung finden Sie auf der Rückseite.

お申込みは20才未満の方はご遠慮ください。●お酒は20歳になってから。未成年の飲酒は法律で禁止されています。

ビッグ・エス THE LIQUOR SUPERSTORE

会員制

第2回 ドイツワインの樹

お申込み特典

まずお届けします!

シュペトレーゼワインを1本プレゼント
(お申込確認後お届けします)
※1口につき1本、3口以上お申込みでさらにプラス1本プレゼント。
(例:6口お申込みで7本プレゼント)
Zur Anmeldung erhalten Sie als Geschenk eine Flasche Spatlese.

オリジナルワイン シュペトレーゼ
※写真はイメージです。

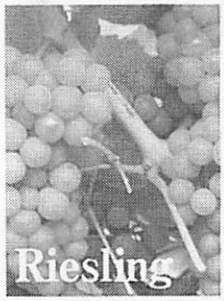
ワインの樹 継続 プレミアム特典

前回の会員様で第2回目も継続お申し込みいただくと、お申し込み特典ワインを

さらにもう1本プレゼント!

オリジナルワインの樹について

ぶどうは白ぶどう、最高級品種リースリング上品な酸と甘さのバランスが絶妙。



樹のオーナー1年間のお楽しみ

はじめにオーナーの会員証をお送りします。
3軒のワイナリーからの情報をもとに今年の天候や畑の様子、ぶどうの出来具合、ファミリーの様子など写真を交えてE-mailもしくは封書にてお便りいたします。
Wir schicken Ihnen zuerst die Mitgliedskarte.
Wir teilen Ihnen per Postkarte oder E-mail mit, wie das Wetter ist und wie der Wachstum der Weinstöcke verläuft.

最後のお楽しみ オリジナルワインについて

3軒のワイナリーで今年育つリースリング種のぶどう果粒を絞してワインを造っていきます。ワインは農産物ですから、なにより天候次第!!品質特級、収穫量とも10月中旬の収穫までわかりません。
Die Wetterverhältnisse versprechen einen qualitätiv hochwertigen Wein.

お届けするワイン

平年でお届けするワインの本数は(3本分の樹から)5~6本でリースリング種の白ワインです。収穫後、発酵、熟成、瓶詰めを経て、みなさまにオリジナルワインをお届けする時期は2004年初夏(6~7月)の予定です。どうぞご期待ください。
In der Regel kann man mit drei Weinstöcken vier bis fünf Flaschen Wein gewinnen. Wir schicken ihnen den fertigen Wein dann im Frühsommer 2004. Sie können sich schon darauf freuen.

第1回「ドイツワインの樹」お届けワイン実績

ペーター・バルフ・ホイザー リースリングシュペトレーゼ	2本
ベルナ・マンツ リースリングアウスレーゼ	2本
カール・ベーター・フーフ リースリングアウスレーゼ	2本

合計6本お届け

会員の皆様のワイン
5月 6月 7月
ドイツ出航 日本通過 お届け

生産量の構成と品質分類

Qualitaetswein mit Praedikat (Qmp)
クバリテーツワイン ミット プレディカート
ドイツワインの中の最高クラス「肩書き付き高級ワイン」
第1回「ドイツワインの樹」でお届けするワインはすべてこのクラスです。

Qualitaetswein bestimmter Anbaugebiete (QbA)
クバリテーツワイン ベシュティムター アンバウゲビート
ドイツの国内基準をクリアした生産地限定上級ワイン。日本で一番多く売られています。

Landwein ラントヴァイン
指定栽培地名付きテーブルワインです。

Deutscher tafelwein
ドイッチャーターフェルヴァイン
ドイツのテーブルワインです。

お申込み期限 Anmeldeschluss

2003年9月30日

口数に限りがあります。
満口になり次第締め切らせていただきます。
お早めにお申込みください。

年会費

※お申込時にお支払いいただきます。

1口 10,000円 税込

Der jährliche Mitgliedsbeitrag beträgt 10,000 Yen pro Einheip (incl. Steuern)

お申込み・お支払い方法

お申込、お支払い方法は下記の中からお選びいただけます。

お申込み方法	お支払い方法	入会
申込み書を 店頭にて受付 / FAXにて受付 / メールにて受付	●店頭にて現金払い または ●郵便振替	入金確認後 会員証発行
ホームページ e-shop BIG-S(楽天市場) にて受付	クレジットカード払い	承認確認後 会員証発行

Bezahlung
Bar in einer der Filialen, per Postüberweisung oder mit Kreditkarte(vonder Rakuten-Homepage aus).

お申込み先

株式会社ビッグ・エス各店舗
●お申込みFAX 087-870-0355
●ホームページアドレス http://www.big-s.co.jp
●メールアドレス shop@big-s.jp
●e-shop BIG-S(楽天市場) http://www.rakuten.co.jp/big-s/

郵便振替先

口座番号 01630-3-56911
口座名称 株式会社ビッグ・エス

Die Anmeldung kann telefonisch, per Fax, per E-mail oder direkt von der Homepage von Big-S aus erfolgen. Sie können auch persönlich zu Anmeldung in eine unserer Filialen kommen und dort direkt bezahlen.

こんなお便りが届きます。

2002年のお便りです。

ご了承ください。
◇お申込みいただいたあとのキャンセル・ご返金は致しかねます。
◇2003年の秋に収穫し、出来上がるワインはその年の天候により品質などが異なりますので、ご了承ください。
◇楽天市場では代引きでのお買上げはできません。
◇天候によりワインが出来ない場合は当社オリジナルワインを4~5本お送りいたします。
◇ワインお届け時に、会員様の更新確認をいたします。
◇会員証は入金・承認確認後、3~4週間内に発送致します。未着の場合は下記お問い合わせ先まで、ご連絡ください。

Hinweise
◇Eine Stornierung nach der Anmeldung ist nicht möglich.
◇Bitte beachten Sie, dass die Qualität des Weins ja nach den Wetterverhältnissen schwanken kann.
◇Die Anzhl der Winstöcke begrenzt ist, ist eine baldige Anmeldung ratsam

お問い合わせ先 株式会社ビッグ・エス「ドイツワインの樹」係 香川県高松市春日町1627-1 TEL(087)843-7711

お申込みは20才未満の方はご遠慮ください。●お酒は20歳になってから、未成年の飲酒は法律で禁止されています。

キリトリ線

ドイツワインの樹のオーナー お申込み書

フリガナ
お名前 Name
お申し込み口数 Anmeldungs Einheit 口

〒□□□-□□□□ フリガナ
ご住所 Adresse 都道府県

お電話番号( ) Telefonnummer
※現在の会員様のみご記入下さい。
会員No. Mitglied-Nummer

※お届け先が上記と異なる場合のみご記入ください。
フリガナ
お届け先名称 Liefername
お届け先お電話番号 Liefertelefonnummer ( )
〒□□□-□□□□ フリガナ
お届け先ご住所 Lieferadresse 都道府県

お支払い方法 bezahlen □現金 bar □郵便振替 ueberweisung

※ご記入もれのないようにお願いいたします。 Bitte vollständig ausfüllen

E-mail アドレス
お持ちの方は必ず正確に記入してください。お便りメールをお送りします。ご記入いただけない場合は特別なメールでのお便り及び通信販売でのお買得情報をお届けできません。ご了承ください。

アンケート ✓を入れて下さい。

(1)ワインの樹よりできたお届けワインは下記のどのタイプがよろしいですか?
□甘口のみ □辛口のみ □甘辛半分ずつ
(2)お申し込み及び継続特典のワインは下記のどのタイプがよろしいですか?
□甘口のみ □辛口のみ □甘辛半分ずつ
(3)お申し込み及び継続特典のワインは、どちらへお届けしますか?
□申込者住所 □別お届け先住所 ※必ずご記入下さい。

輸入代行
株式会社ビッグ・エス
〒761-0101 香川県高松市春日町1627-1 TEL 087-843-7711 FAX 087-870-0355
屋島店 TEL 087-844-0831 三木店 TEL 087-898-8700
郷東店 TEL 087-881-7755 高瀬店 TEL 0875-56-2555
浅野店 TEL 087-889-0010 白鳥店 TEL 0879-24-0234

店(館)	受付者	㊞

Marienhof
Germany

類まれなるガラス工房のハンドメイドによる技術と、ライン南部屈指のワイナリー・マリエンホフとの美しき融合。
日本初登場のリキュール・ブランデーシリーズです。
目を引くおしゃれでユニークなボトルの数々。
現在およそ140種類が用意されており、続々日本への入荷を控えています。
詳細カタログをご希望の方はお問い合わせください。

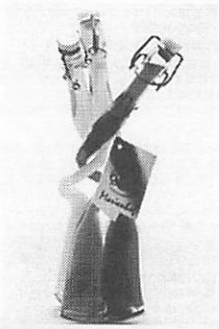
コケティッシュな魅力

501020 ハートボトル
ピーチリキュール

104052
手押し車付リキュール

503021 ハイヒールボトル
ピーチリキュール 赤

洗練されたデザイン・バランス



700404 トリオスタンド
ピーチ・ハックルベリー・
ペパーミントリキュール

502907 エロチックボトル
イチジクリキュール

502114 チューリップボトル
マルメロリキュール

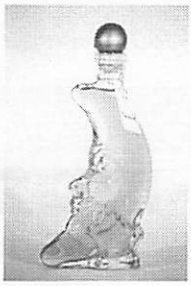
フレッシュなフルーツだけを厳選して

507039 フルーツ入りデコレーションボトル
チェリーリキュール

605904 フルーツ入りハートボトル
チェリーリキュール

妥協なし！細部にまでこだわる技の競演。

400411/G フルーツボトル
グレープリキュール



502314 ムーンボトル
マルメロリキュール

502507 スタイルボトル
イチジクリキュール

輸入総販売元

樂空間　L'est -Japan

〒769-0104　香川県綾歌郡国分寺町新名1543
TEL:(087)874-5155
e-mail:snowman_raku@ybb.ne.jp
URL:http://www.e-raku.com

讃岐香川相互支援交流「モノ(者と物)づくりを通してネットワーク」発足について

はじめに：去る2001年9月23日に香川県では内閣府と共催ではじめて県民・企業・行政が協働でボランティアのお祭りをしました。『ボランティアフェスティバルかがわ 2001』です。このお祭りで呼びかけとなったのが“人の事を考える仲間づくり”でした。そして、その時に「さぬき夢アイス(夢愛す)大集合！」ブースに参加しました仲間の有志が中心となって、その後領域を越えていろいろな分野で活動し大きな輪(和と和)が広がりました。

発足に当たって

〔趣 旨〕：この輪(和)をさらにインターネットやファックスネット等で、いつでも相互に支援や参加交流が出来るネットワーク作り「香川で元気に頑張る仲間達のネットワーク＝モノ(者と物)づくりを通してネットワーク」を発足することになりました。

尚、このことは行政(香川県各課,協会様をはじめ市,町の関係機関)の方々や各種の県、内外の団体等のご協力やアドバイスを頂きました。

（補足：歴史や文化、国際環境、福祉等の幅広い分野でのご協力やアドバイスをいただきボリュームのあるネットワークの地が出来つつあります。）

注意点：このネットワークは多方面(一部、国外)のホームページにリンクもしますが物の販売や寄附行為等は致しませんのでどうかご理解下さい。

※ きっかけになった例

「私達のグループ・共に歩むふれ愛サークル＆支援センター」は“地域交流・ボランティア支援”を目指して、共に歩む人達と行政や団体等と共助・共(協)働を行っています。その中でも最近、特に養護学校卒業生に対しての環境の場はきびしい状態です。ある団体等の支援依頼を紹介しますと：「知的障害を持つ子供が養護学校を卒業した後、地域で自立と社会参加を目指して生きがいのある生活を送ることが出来るように私達親は願っています。しかし現在の社会情勢の中で障害を持つ子供が就労するのは困難であり、また福祉就労の場も満杯状態です。今後は、新たな就労の場を作るため、私達親は活動します。」このように一生懸命に頑張っておられる方々に「何とか支援を…！」で数年前より始めた讃岐香川の特産品を使った“夢の讃品づくり(夢愛す商品)”で夢アイスが誕生し平成13年11月26日組織化（香川県登録：“さぬき夢愛す”消費促進交流会）し、今でも関係者や会員も増え、県内外各地のイベント・催し物等で活躍しています。そして各小規模作業所や授産施設の自立事業として又、各種ボランティア活動費としても少々の援助や支援が出来るようになりました。

※ これから：以上のような取り組みのお陰を持ちまして支援・協力をしていただける協会や団体等のネットワークも出来ました。そしてこのたび“讃岐三白”や“お接待の心でもてなし”を、生かした『本モノ(者と物)づくり』を通して地域おこしや福祉施設支援・ボランティア活動支援に頑張って参りますのでよろしくお願い申し上げます。

お問い合わせは、『共に歩むふれ愛サークル内『モノ(者と物)づくりを通してネットワーク』世話係まで

ＴＥＬ 0877－28－5192

ＦＡＸ 0877－28－5189

私の近況

ペーター・ヒンメルシュタイン

私は1993～1996年の間に、香川県の国際交流員として活躍しておりましたが、この3年間の滞在をいつまでも忘れることができません。

帰国後、日本とビジネスをしているドイツ会社に入社したかったのですが、応募した時に日本語能力だけではなく、経済学の知識も必要だという会社側からのコメントばかりでした。そのため、取りあえず2年間にわたって商人になるための集中講座を受講しておりました。その後、主にインターネットなどで仕事を探しておりましたが、結局、Plauener Spinnhütteという会社に入社できるようになりました。

Plauener Spinnhütte（プラウエン紡績工場）はPlauen市（旧東ドイツのサックセン州、フランクフルトから350キロぐらい離れているところ）にあり、天然絹の加工において60年以上の伝統を有しております。主な製品は，100%絹の生地（カバーリング、羽毛布団、カーテン用など）や100%絹の完成品（高級ベット用品など）となっております．私自身はAsia Sales Managerとして，アジアの国々への販売、輸出を担当しております。年に3～4回ぐらい日本にも出張しておりますから、もし機会があれば、皆さんにまたお会いしたいなーと思います、

連絡先
Peter Himmelstein
Wettinstr.67
08525 Plauen
ドイツ
Tel.　+49 3741 550918
Fax.　+49 1805 32 32 66 55091
携帯　+49 178 34 00 819
電子メール：　himmelstein@freenet.de（もちろん、日本語でも結構です）

平成１５年度香川大学工学部国際インターンシップ交流会の報告
（2003年7月26日）

４年目になった香川大学工学部の国際インターンシップ生の本年度は４名でした。ドイツからは、昨年は２名でしたが、今年は、ボン=ライン=ズイーク大学からの１名だけ、４月７日から８月２９日まで、(株) NTTドコモ四国が受け入れ派遣先で、香川町の伊賀さん宅でホームステイしていらっしゃるゲルマン系のKonstanze Langさんでした。

我々香川日独協会は、国際インターンシップ交流会でインタヴュウを試みました。

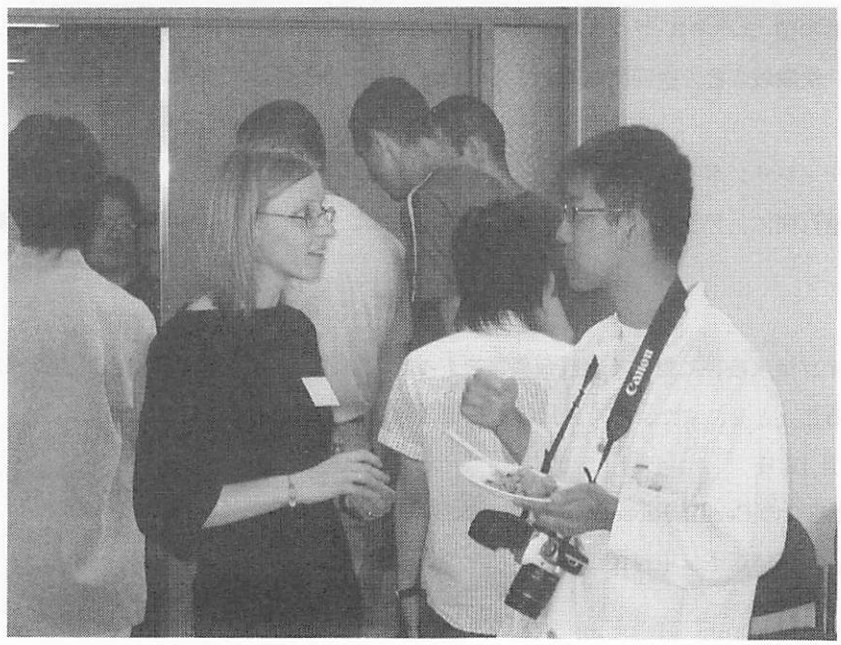
まず、「日本での研習は、如何ですか」に対して、「日本語以外に英語で、毎日出社してから退社するまでずっと説明書を読み続けています。」しかし、「どうしても集中力が続かないときや、途中で投げ出したくなったり、読み終えても、理解出来るまでは仕事を始めることが出来なかったことがありました」とのことでした。「とにかく耐えて根性で読みきり、やっと仕事が出来ました」と自分が、日本の企業での仕事が会社の一助になったことに喜びを感じ、「自分を向上するため」と思うと、「とても貴重な経験をさせていただきまして感謝しています」とのことでした。

また、研修のレポート作成中は、特にうるさいと感じたことは一度もなく、実に快適に過ごすことが出来ました。

琴電バス池西線で会社へ通っていますがホストファミリーの伊賀さんや、会社での友達との出会いがあり、いつでもその連絡が取れ、特に、ウイークエンドには、メンバーの一員として手厚い歓迎をされて本当に「楽しいかった」とのことでした。

追：今回のインターンシップ受け入れ企業やホストファミリーの選定をしていただいた岩本教授や秦教授にこころから感謝申し上げます」とのことでした。

（東原 實）



平成14年度 香川日独協会活動報告

4月6日

フランクフルト独日協会理事・シュレーダー美枝子女史来県(俳号 仁田川 朱麗)

フランクフルト俳句会のメンバーと松山で日独合同句会をもったあと立ち寄られる

坂東のドイツ館を訪問。当時収容されていた俘虜の様子の展示を見学、墓碑に参拝

4月11日

ヨハネス・プライジンガー総領事ご夫妻来県・丸亀市長表敬訪問・こんぴら歌舞伎鑑賞

4月27日

香川県立坂出高校音楽科 山崎教官と48名がヨーロッパ音楽研修旅行に出発

パッサウ独日協会の協力でパッサウで演奏会を催す。パッサウ独日協会会長に挨拶文を託す

4月27日

香川大学工学部国際インターンシップ交流会 ドイツ人学生2名来県(ホームステイ)

Michael Rabenda(ボン・ラインジーグ大学) Bastian Wilke(ミュンヘン工科大学)

5月11日

理事会

5月21日

ドイツ・ミュンヘン市民大学 日本語講座受講のドイツ人21名が高松駅に到着

高徳線乗り換え時間を利用して駅構内待合室で交流会をもつ。

東かがわ市引田町・かめびし醤油醸造所を見学 引率者谷村哲氏(ミュンヘン市民大学語学講師)

5月26日

2002年度香川日独協会総会・懇親会(全日空ホテルクレメント高松)

大阪・神戸ドイツ総領事館杉岡数幸翻訳官が列席。 持参いただいたドイツグッズの抽選に会場が沸き和やかな雰囲気を楽しむ。坂出高校音楽科教官・山崎先生のヨーロッパ研修旅行のビデオを鑑賞

香川日独協会会報 第10号発行

7月1日

ドイツ連邦共和国 ヨハネス・ラウ大統領歓迎会(東京)

世界サッカー決勝戦応援と次回開催国としての引継ぎのための来日(ドイツは準優勝)

7月26日

ビールパーティをサンポート北端「ミケイラ」で開催

台風一過の晴れ間に、テラスへ出ての爽やかな夕食会はことのほか楽しく時間を延長して満喫した

8月31日

理事会

未曽有のドイツ洪水被害に対する義援金募集をドイツ大使館、ドイツ領事館から協力依頼があり、会員にお願いすることとし、また、広く県民にも報道を通じてお願いをすることとした

8月26日～9月16日

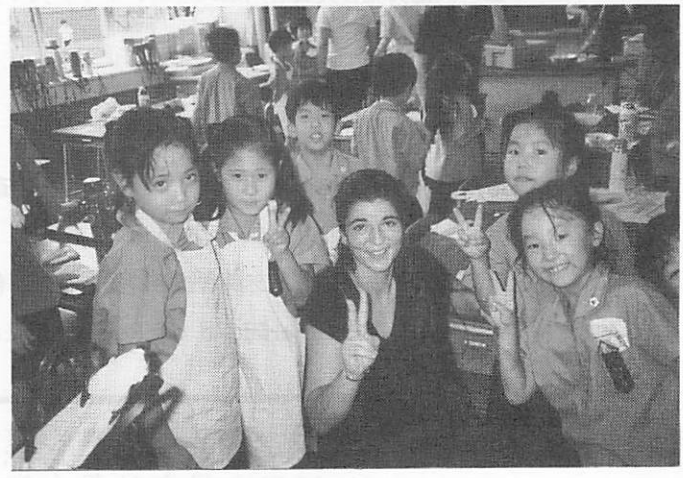
(財)日独協会紹介のCecilia Riese(Wiesbaden大学生)がホーム・ステイ

高木文夫宅、大坂靖彦宅、中村賢二郎宅

ヨハネス・プライジンガー総領事ご夫妻来県

丸亀城を背にして

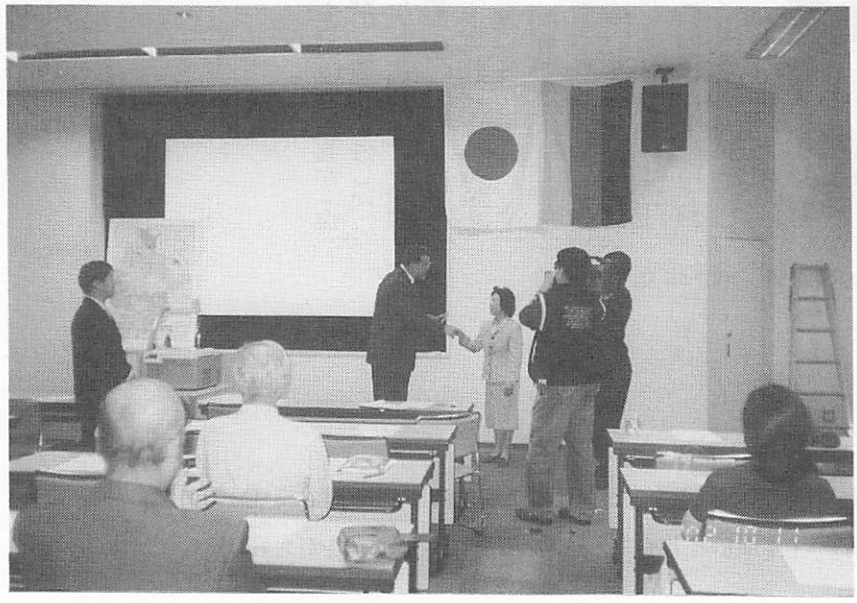
（2002年4月11日）



Cecilia Riese ホームステイ

附属高松小学校を訪問

（2002年8月26日～9月16日）



ドイツ洪水被害義援金を寄贈

ドイツ領事館副総領事 Willi Späth 氏に託す

（2002年10月11日）

9月16日～18日

関純子(京都)、宮下(堺)両氏による観光案内(Cecilia Riese)

9月7日

全国ドイツ語スピーチコンテスト後援　徳島県鳴門市ドイツ館にて(ビッグ・エス主催)

9月8日

エンゲル祭後援(丸亀市)　武部理事出席・スピーチ。　チター演奏会後援(高松テルサ)

9月15日

2002「かがわ第九」合唱後援　香川県県民ホール

9月29日

独日文化交流育英会有川陽氏と若いドイツ人7名と交流会

10月3日

ドイツ統一記念日

10月11日

講演会「ドイツ総選挙を終えて　これからの展望」

講師　ドイツ総領事館副総領事 Willi Späth 氏　　通訳 杉岡数幸　　司会 羽白洋副会長

講演のはじまりにドイツ洪水被害義援金を副総領事に托する　総額416,000円

寄贈先は旧東独 Bitterfeld 市 (Dr.Rauball 市長からの義援金のお礼と使途についての説明文は次頁)

独総領事館に水害の義援金

香川日独協会

香川日独協会（中村敏子会長）は十一日、大洪水によって大きな被害を受けたドイツに義援金四十万八千円を贈った＝写真＝。

ドイツは今夏、大雨で東部地域のエルベ川がはんらん。流域が洪水に見舞われ、約三十三万七千人が被害に遭った。

贈呈式は高松市番町一丁目の県社会福祉総合センターであり、中村会長が「復興の一助としてほしい」と大阪・神戸ドイツ総領事館のヴィリー・シュペート副総領事に義援金を手渡した。

副総領事は「まだ暖房器具などが使えない状態が続いている」と被害状況を説明。「日本は助け合いの精神が根付いており、その心に大変感謝している」と述べた。

（四国新聞　2002年10月13日）

10月13日

香川日独協会創立記念日

10月13日

「かがわ国際交流フェスタ2002」に参加展示販売をする・事業企画委員会(担当:岡谷理事)

2ブースを使いこれまでの活動のパネル展示とドイツグッズを販売(プレッツェルが大好評)

10月17日

BONN独日協会との姉妹提携記念日

STADT BITTERFELD

- Der Bürgermeister -

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa
Fujimoto Yasuo Kata
2-2-25 Saiho-cho
T a k a m a t s u - s h i
Kagawa-ken 760-0004

Ihr Zeichen	Unser Zeichen	Datum
	rau-fö	2002-12-18

Sehr geehrte Damen,
sehr geehrte Herren,

mit großer Freude haben wir erfahren, dass Ihre Gesellschaft für die Betroffenen der Hochwasserkatastrophe gespendet hat. Die Stadt Bitterfeld bedankt sich ganz ausdrücklich für dieses außergewöhnliche Engagement.

Diese großzügige Spende Ihrer Gesellschaft, erfüllt uns mit großer Dankbarkeit. Diese Spende wird dazu beitragen, die dramatischen Folgen der Hochwasserkatastrophe abzumildern und unseren Bürgern wieder Mut zu geben. Es ist gerade jetzt für unsere Bürger und insbesondere für unsere Kinder wichtig, dass ihre gewohnte Umgebung wieder neu gestaltet wird und die schlimmen Tage bald vergessen werden.
Wir werden Ihre Spende dafür verwenden, dass die geschädigten Kindereinrichtungen und Sporteinrichtungen instandgesetzt werden.

Wir sind überaus glücklich und gerührt, dass nicht nur die Bürger der Bundesrepublik Deutschland uns bei der Beseitigung der Hochwasserschäden zur Seite stehen, sondern auch die japanischen Bürger durch ihre spontane Solidarität vielen Betroffenen wieder Mut geben. Dafür spreche ich allen Spendern meinen Dank aus und verbleibe

mit freundlichen Grüßen

Dr. Rauball
Bürgermeister

Bitterfeld-Wolfen
Stadt Bitterfeld
Postfach 1251
06732 Bitterfeld
Telefon (03493) 361-0
Telefax (03493) 361-143
e-mail: bgm@bitterfeld.de
Kreissparkasse Bitterfeld
Kontonummer: 3400 4073
BLZ 8005 3722
\\BITTERFELD\VOL1\DATEN\FOERSTER\WINWORD\DankeJapan2.doc

Bitterfeld 市長

親愛なる香川日独協会の皆様

私どもは、香川日独協会様が今回の大洪水に対し義援金を寄付してくださったことを、心からの喜びだと感じました。Bitterfeld は今回のご活動に本当に感謝している次第でございます。

香川日独協会様よりの多大なる義援金に対し、私どもは感謝しており、その義援金は代行洪水の悲惨なイメージを拭い去り、市民に再び平穏をもたらすのに、役立てられるでしょう。ちょうど今、市民、特に子供たちにとっては住み慣れた環境が再びよみがえり、悪夢の日々を早く忘れることはとても重要なことだと感じています。
私どもは香川日独協会からの義援金を、被害を受けた子供用施設、スポーツ施設を修理するのに使わせていただこうと考えています。

Bitterfeld 市民、ドイツ連邦だけが支援をしてくれるだけでなく、日本の方々も自発的連帯を通して洪水被害者に安心をくださることを、私どもは本当に嬉しく、また感動しております。その感謝の気持ちを締めくくりの言葉とさせていただきます。

心をこめて

Bitterfeld 市長
Dr. Rauball

Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V.
独日協会ボン

An die Präsidentin der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa
Frau Toshiko Nakamura

Im Dezember 2002

Sehr geehrte, liebe Frau Nakamura,

seit 8 Jahren besteht ein Freundschaftsband zwischen unseren beiden Gesellschaften. In dieser Zeit wurden unsere beiden Länder je von einer großen Naturkatastrophe heimgesucht. 1995 brachte ein starkes Erdbeben über Kobe und den Kansai-Distrikt Tod und Zerstörung. Selbst in Takamatsu wurden Schäden registriert. Und im August 2002 verwüstete ein Hochwasser von unvorstellbarem Ausmaß die gerade wieder aufgebaute Region um Dresden in Sachsen. Tausende von Menschen verloren ihr Hab und Gut und wertvolles Kulturgut wurde zerstört.

Bei beiden Katastrophen zeigten die Mitglieder und Freunde unserer Gesellschaften ihre Verbundenheit mit dem vom Unglück heimgesuchten anderen Land. Sie versuchten, mit einer Geldspende einen Beitrag zu leisten zum Neubeginn eines Wiederaufbaus. 1995 konnten viele Mitglieder der Bonner DJG die JDG Kobe mit einer ansehnlichen Spendensumme unterstützen.

Es hat unseren Vorstand und mich tief berührt, als wir von der Spendenaktion der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa erfahren haben.

408.000 Yen
wurden von zwei Firmen, 52 Mitgliedern und 29 anderen Spendern für die in Not geratenen Menschen in Sachsen zusammengebracht.

Es war eine beispielhafte Aktion, die große Anerkennung verdient. Wir danken allen Spendern in Kagawa aus tiefsten Herzen für diese Hilfe. Diese Brücke der Freundschaft und Hilfsbereitschaft möge immer das Zeichen unseres Dankes tragen.

Leider ist es mir bisher nicht möglich gewesen, den Weg der Spende vom Generalkonsulat in Kobe bis nach Sachsen zu verfolgen. Ich nehme aber an, dass Herr Generalkonsul Preisinger, der die Summe entgegengenommen hat, Ihnen darüber berichtet hat. Meine große Hoffnung ist, dass die Menschen in Sachsen erfahren haben, dass sie Freunde in Japan haben, die ihnen mit ihrer Geldspende Mut zum Neubeginn geben wollten.

Mit aufrichtigem Dank grüße ich Sie herzlich

M. Mönch

Marianne Mönch
(1. Vorsitzende der DJG Bonn)

Geschäftsstelle: c/o Marianne Mönch, Auf dem Köllenhof 47, 53343 Wachtberg,
Tel./Fax: 0228-348365, E-mail: djg-bonn@djg-bonn.de; www.djg-bonn.de

独日協会ボン

親愛なる中村様へ

私たちの協会間の親交も 8 年が経ちました。その間、私たちの両国では大きな自然災害が起こりました。1995 年には高松でも感じられたように、阪神・淡路地区で大地震があり、死と破壊をもたらしました。そして昨年 8 月には信じられない規模の大洪水で、戦後の復興が終わったばかりのザクセン州のドレスデン地区が被害を被りました。数え切れないくらいたくさんの人が全財産を失い、貴重な文化遺産も損害を受けました。

こういった双方の大災害において、私たちの両協会の会員ならびに知人の方々は、災害あったお互いの国を思い、義援金という形で復興の開始に大きく貢献してくれました。1995 年には私たちボン独日協会は神戸日独協会に相当な資金援助をすることが出来ました。

私どもボン独日協会が香川日独協会の今回の義援金活動のことを聞いて、私たちはとても心が温まる思いをしました。

「ザクセンでの災害に巻き込まれた人々に対して、2 つの企業、52 人の会員、そして 29 人の他の方々から 408,000 円が援助されました。」

それは本当に多大な評価に値する模範的活動であったように思います。私たちは香川からの支援に対し、心の底から感謝をしています。お互いの友好と支援という掛け橋が、私たちの感謝の気持ちを表しているように思えます。

今のところ残念ながら、大阪・神戸総領事館からザクセンへの資金援助をお手伝いすることは私には無理なところがありました。しかし、すべての義援金を取り仕切っていらっしゃったプライジンガー総領事は、そのことについてもう中村様に連絡されていることと思います。私の大きな願いは、ザクセンの人々が日本という国に自分たちの再出発に力を貸してくれた人がたくさんいるということを感じてくれたことです。

心よりの感謝を込めて

Marianne Mönch

かがわ国際交流フェスタ 2002 に参加展示販売

（2002 年 10 月 13 日）

米子日帰り旅行

清水寺の見事な紅葉

ビア・ハウスにて交流会

（2002 年 11 月 9 日）

11月9日

米子日帰り旅行　大山中腹にあるビア・ハウスで米子日独協会との交流会を待つ

岡山の県境トンネルをぬけると雪国であった。大歓声の中冬タイヤの点検があってからバスは清水寺に向かい，米子日独協会事務局長伊藤先生と会員10名と合流して精進料理をいただく。グラデーションに織りなす紅葉を背景に写真を撮る。荘厳な社殿を見学

足立美術館を鑑賞ののち、米子日独協会員の待つ大山へ一路はしる。雪の残るビアハウスにはいり、地ビール、ケーキとコーヒーで談笑。ターニャ(Wiesbaden大からの留学生)も門脇会長と別れを惜しみながら帰路に着く

11月15日

理事会

義援金合計の報告、協会員2社、54名 一般29名、総合計64件(2社、83名)　総額416,000円

11月22日～12月25日

ハイデルベルグ・クリスマスマーケット大阪2002　開催（新梅田シテイ・ワンダースクエア）

12月13日

独・仏エリゼー条約締結40周年記念行事の打ち合わせ会　大坂副会長出席

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館にて

12月17日

高松高校第15回ハートフルコンサート「第九・歓喜の歌」演奏発表会 協力

12月21日

ホームステイ報告会（アイパル香川 第3会議室）

発表者3名 明神実枝、鈴木寛子、武井素子　若い人たちの新鮮な感性と行動力に感銘をうける

終了後 忘年会(讃岐海鮮料理いけす道楽)　学生会員加藤雅明さんの名司会でビンゴゲームに弾む

平成15年1月19日

ヨハネス・プライジンガー総領事が高松高校を訪問、生徒・教官70名の「第九」演奏を楽しむ

その後、協会員との交流会に出席され有意義なひとときを過ごす　レストラン「ミケイラ」にて

この冬一番の寒波がおしよせ、吹雪と強風の悪天候ながら、会場は終始なごやかな和気藹々の楽しい夜をすごし、総領事と赤松翻訳官は車で9時帰神された

2月15日

理事会

3月5日

外国客船「アスター」号がサンポート高松岸壁に寄港(午前7時)　船客は殆どドイツ人

玉藻公園でお茶席の説明とお抹茶の接待、生け花、折り紙のデモンストレーション

（日独協会主催　担当：加藤雅明、葛原出起、尾原多恵子、内田礼子、渡部恵子、中尾友紀）

昼食後、船内見学と写真撮影を楽しむ

3月19日

全国日独協会連合総会東京で開催（会長出席）

ヨハネス・プライジンガー総領事来高

レストラン「ミケイラ」での交流会

（2003年1月19日）

外国客船「アスター」号寄港

歓迎式典にて

折り紙を楽しむ

玉藻公園での記念写真
（2003年３月５日）

【表紙】

ドイツの玄関都市でもあるフランクフルトについて特集を組んでみることにした。現地在住のシュレーダー美枝子さんのフランクフルトへの想い，デーゲンさんのユニークなフランクフルト論をお楽しみいただければ幸いである。

なお，フランクフルトで一番有名なオーケストラはフランクフルト放送交響楽団で，最近では1995年，2000年，2002年と来日している。1995年と2000年は，このオーケストラの評価を世界的に高めたエリアフ・インバルの指揮で，得意のマーラーの交響曲第5番が演奏された。私は1995年は大阪，2000年は岡山のそれぞれのシンフォニーホールで同曲の演奏を聞くことができたが，さすがにこのコンビの十八番という感じであった。2002年は，ヒュー・ウォルフという新しい音楽監督とともに来日し，岡山でのコンサートではベートーヴェンの交響曲第5番《運命》が演奏された。ヴァイオリンのファーストとセカンドをステージの左右に分け，ホルンとトランペットはバルブのない古風な楽器を使用し，ティンパニも小型の古楽器風の楽器を用い，非常にスリリングで生気あふれる演奏を楽しむことができた。オリジナル楽器による演奏スタイルを，モダンオーケストラの演奏に巧みに取り入れたといえるであろうか。今後のフランクフルト放送交響楽団の活動にも大いに期待が寄せられる。

挿し絵： 関 純子　　活動報告の写真： 吉岡 琢郎

香川日独協会会報 第11号
2003年10月発行

発　　行 ： 香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA
〒760-0017 香川県高松市番町 4-4-20
Tel: 087-861-6820
発行責任者： 中村 敏子（会長）
編　　集 ： 最上 英明
印　　刷 ： （株）万成社